
時代遅れの鴉(AC4二次創作)

ろる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時代遅れの鴉（AC4二次創作）

【Nコード】

N5172U

【作者名】

ろる

【あらすじ】

アーマード4の二次創作

ある日、フィオナに拾われた主人公（主オリジナル）は、基地の警備や実験の手伝いとして雇われる、だが、当初フィオナが予想していた事とは違い、元レイヴンである主人公にはネクストを動かす為に必要なAMSの適正があると分かる。

その事により、急遽、主人公はネクストのテストパイロットとして雇われる。

ネクストを操縦するの事をリンクスと呼ばれるなか、主人公はただ

繋がる者

一人レイヴンと呼ばれた。

時代最後のレイヴンがネクストを駆け再び戦場に舞い降りる。

第一話『鼓動』（前書き）

この小説の主人公は変態ですが、作品にはなんら問題は御座いませ
ん、どうぞご安心してお読みください。

尚、誤字、脱字、誤変換などがありましたら感想の方でご指摘いた
だけると幸いです。

それ以外にも言葉の使いまわしについて間違っている所があれば是
非教えてください。

前置きが長くなってしまいましたが、このように作者は悪ふざけが
過ぎる所があります。程よく叩いてあげて下さい。確実に凹みます。
フロム脳の皆なら、おらの文才でもフロム脳修正を掛けてくれる
と信じてるぞッ！

第一話『鼓動』

彼と出会ったのは偶然？ それとも必然？

「伏せろ！」

突如、前から走って来た男がそう言い。私は言われるがまま、その場にしゃがみ込んだ。

「誰だお前は！ うわああ」

「おいおい、こっちは三対一だぞ。囲め！」

私を助けるため、屈強な男に立ち向かった彼。助けに入った男と三人の男達が殴り合いに発展する中、私は脇目も振らず一目散に薄暗い路地から逃げたした。

「はあはあ」

彼は誰？ 如何して助けたの？ 彼は無事なの？ そんな一抹の不安に駆られながらも私は必死に逃げた。

「はあはあ…彼は…大丈夫…なのか…しら」

明るい広い通りに出ると、まずは息を整え。自分の状況を整理した。

AMS研究の第一人者であり、私の父であるイエルネフェルト教授の資料を取ってきてほしいと、エミールに頼まれ。

一人、自宅から研究所に向かっていた歩いていた。

途中、近道をしようと、いつもとは違う道を通ってしまったのが行けなかった。

いや、今、思えばそれでよかったと思う。

「おい、アンタ、あんな薄暗い所を女一人で歩くもんじゃない」

突然、背後から話しかけられ、私は慌てて振り向いた。

「貴方は」

私が振り向くと、先ほど助けに入ってくれた男が立っていた。

階級章が付いていない軍服のような服に身を包んでいたが、その軍服？ はとても古く、汚らしい物だった。

彼は乱れた服を整えると、一步近づき、私の目の前に立った。

「随分綺麗な格好だな。見たところ、何処そのお嬢さんって感じだな、あんた護衛は？」

「そんなもの居ないわよ、そんな身分でも無いもの」

「ふーん」

男は然もつまらなそうにそう言い、私の方を見ると、何か閃いたような顔をした。

「そうだ！！ 俺を護衛に雇わないか？」

「え？」

何を言ってるのか正直分からなくて、困惑している私に彼は更に詰め寄り。

同じ言葉で、更に畳みかけた。

「だ・か・ら。俺を、雇わないか？ と言ったんだ」

私はこれ以上の会話は無駄だと思い、彼を無視し、再び、研究所の方に歩き出した。

「おいおい、待ってくれよ！」

男は慌てて私について来ると図々しくも、私の隣に付いた。

「なあ、頼むよお嬢さん、人助けだと思ってさ。こう見えても傭兵

だっ たんだぜ？

そこらのSPよりよっぽど腕が立つぜ！ それにACの操縦もできるぜえ、まあノーマルが関の山だが……」

「ACの操縦？」

私は少しか彼に興味を持った。

「ノーマルが操縦できるって事は、元レイヴンなの？」

男にそう問うと、男は自信たつぷりに

「おう、俺の名前は『エスガー・レインウォーター』って言うだ、アグルって皆は呼んでいる」

私は驚いた、父の資料に記載されていたレイヴンの一人。

ほとんどのAC乗りは特定のアセンブルにしているが、エスガー・レインウォーターと言うレイヴンは特定のアセンを持たない。

作戦によって様々なパーツを使い分ける事によって生き残って来た凄腕のAC乗り。

国家解体戦争でKIA^{戦死}になったと知らされていたが、生きているとは思わなかった。

私はおそろおそろアグルと名乗る男に聞いた。

「あの、アグルさん。貴方は戦死したと聞かされていましたけど、如何して生きているのですか？」

[illegible]

けたたましく鳴るアラームに画面いっぱいに映る 戦闘不能の文字。

万事休す。

俺のミSSIONに失敗は無かった、だが今回は違った。歩が悪い
 どころでは無い、まず勝てるはずの無い勝負。

格が違い過ぎる、スピードも装甲も、何もかもが。

相手のパイロットが態々外部スピーカで挑発して来たが、俺には言い返す言葉も、余裕すらない。

ネクストはスナイパーライフルを構え、俺は殺されるのを覚悟したが。

だが、しばらく経っても攻撃される気配は無かった。

チャンス。

俺はそう思い、愛用の武器『月光』以外の武器を全てパージし、最後の力を振り絞り、敵に向かって突撃した。

いくらP Aがあっても、この月光を受けては徒では済まないはず。
フライマルアーマー

「クソがつ！ 無駄弾を使い過ぎたか！」

どうやら外部スピーカをOFFにするのを忘れたのか、垂れ流しの音声が相手の焦りを俺に伝えた。

ネクストはライフルを放り捨てるとブレードを構え俺を待ちかまえた。

「うおおおお」

俺はO Bオーバーブーストを使い、一気に距離を詰めた。

だが、その刹那、呆気なく俺の突撃は交わされ、ブレードは空を切る。

O Bを切り、後ろを振り向いたが、敵のブレードは既に俺を捉えていた。

「死に腐れ」

咄嗟に両腕でブレードをガードするも、俺の機体の両腕はあっけなく吹き飛び。

衰える事無い威力がそのまま俺の機体を寸断した。

両腕とヘッドは吹き飛び、完全に機能を停止した機体は、ただの鉄くずと化した。

「ふん、^{レイウン}鴉の時代は終わった、これからは^{リンクス}山猫の時代だ」

敵のパイロットはそれだけ言うと、足早にその場を去った。
見逃してくれた？ いや違う。もうすぐこの機体は爆発するだろう。俺はそう思い、そつと瞼を閉じた。

- - -
- - -
- - -

「で、機体は運よく爆発せず、貴方はそのあとジャンク屋に助けられて今に至ると」

私は説明を終えた彼に「付いてきて」そう短く告げた。

基地内部の重い鉄製の扉を開き

「エミール。約束の書類ここに置いとくわよ」

遠くの方で何やら、通信をしているエミールにそう伝えたと、彼を私の研究所の方に案内した。

「あんた、研究員か何かか？ それにしても随分整った施設だな？」

彼は研究所の中を物珍しそうに見渡した。

「とにかく貴方はまず、奥にあるシャワーを浴びて来て」

私の言葉にアグルは何故か訝しげな顔をした。

「いや、止めておく、あんたと俺はまだ出会って日が浅い、それどころか俺はあんたの名前すら知らない」

「何を言っているのかさっぱり分からないけど。
私は貴方から香る、猛獣のような匂いが気になって仕方無いから
言ってるだけよ」

「ああ、なんだその事か。俺はてっきり……」

彼は何故か少し照れたような顔をしていたが、私はそれよりもこれ以上研究室を男臭くされるのが気に食わなかったので、早くシャワーを浴びるよう言った。

その後、彼は私からタオルを受け取ると、素直にシャワー室へと入った。

「この服どうしようかしら……」

そう思っていると、突然シャワー室から彼の声が聞こえた。

「そう言えば、お前の名前聞いて無かったな。何て名前なんだ？」

そう言えばまだ彼に私は名乗っては居なかったわね。今日は色々置き過ぎて、どうも調子が狂ってるわ。

「私の名前はフィオナ、『フィオナ・イエルネフェルト』よ」

「そうか、フィオナか、良い名前だな」

彼はそれだけ言うと、鼻歌交じりに再びシャワーを浴びた。

「くく、あつ！ フィオナ、まだそこに居るのか？ 俺の服を如^{かが}何^{かが}わしい事に使うなよ」

……………、私は、黙って、その服を廃棄処分した。

「おい！ 俺の服がねえぞ！」

呆れる私は、彼の隣に置いてある服を指差した。

それにしてもどうして全裸なのよ……せめてタオルで隠しなさいよ……。

「何だこれ？ 軍服か？ いや違うな、まあいいや」

彼がそう言い、袖を通した服は、この研究所のテストパイロット用に作らせた服だ。

なんの変哲もないが、この 基地内を歩いていても。

あの格好をしていれば警告無しに射殺と言う事は無いはず。

「とりあえず俺は何をすればいいんだ？」

服を着ると彼はすぐさま、私の方に歩みよると、我が物顔で椅子に座った。

「とりあえず貴方にAMS適正があるか見ます。適正が無ければ、まあこの基地の防衛の為に働いて貰います」

私はデスクに向かい、引き出しに入れてあった。AMS適正を調べる為のマニユアルを開いた。

「なあなあ、これすげえな。これなんていう玩具だ？」

玩具？ 一体彼は何で遊んでいるの？ そんな疑問を抱きながら私は振り向くと、彼は。

「まさか！？」

彼が弄っていた玩具、では無く。彼が弄っていたのはAMSの適正を確かめる為の簡易装置のロボットアーム。
頭にヘルメット状のかぶり物を被り、ロボットアームを動かすという物。

見た目はとても単純な脳波受信機に見え値が、AMS適正が無い

とまず動かないはず。

それを彼は何の説明も無しに動かしている。

「ちょっと来て」

私は彼の腕を強引に掴むと彼を立ちあがらせ、エミールの方へと歩いた。

「エミール、聞いて、彼。適正があるの」

突然の私の言葉にエミールは驚いたような目をした。

「あの、この眼鏡掛けた、よわっちそうなおっさんがエミールか？」

彼の言葉を見殺して、エミールに詳細を伝えた。

彼に関する事、元レイヴンで、AMS適正がある事を伝えると、

エミールは興奮気味に。

「すぐにもっと詳しく調べよう」

そう言い、エミールと一緒に彼を調べた。

「AMSテスト、試験ナンバー〇九。平行移動訓練開始」

「なあ？ 俺は一体いつまで歩けばいいんだ？」

テスト用の疑似コックピットに入り、仮想空間でのネクスト試験を行なっていると彼が文句を言い出した。

「アゲル君、もう少しで歩行テストは終わる、それまでの辛抱だ」

エミールの言葉にアゲルは明らかに不満そうな顔をした。

「でも、エミール、あと歩行テスト以外に、射撃に格闘、クイックブーストQBのテストもあるのでは？」

私がそう言うと、エミールは苦笑いをしていた。

「まあまあフィオナ、これ以上はアゲル君の負担になる、せっかくのAMS適正のあるパイロット何だ。適正だけじゃなくパイロットとしての腕もあるのなんて彼しかないよ」

確かにエミールの言うとおりだ。企業が血眼になりながらAMS

適性のあるパイロットを捜し、見つけ。

それを訓練して実戦投入をしている中、彼はノーマルとも言えども、AC乗り。

それも伝説的なレイヴン、他の企業が見つけたら幾ら出してでも欲しい素材だと思う。

しばらくして、歩行テストを終えると、エミールはアグルと一緒に昼食をとって来るように言った。

私はエミールに言われた通り、彼と軍の食堂で食事を取るべく歩いていた。

「なあなあフィオナ、俺、さっきから知らない男にやたら睨まれるだけ。どういう事だ？」

「知らないわよ、エミール以外と歩いていると大体の男の人はそんな感じよ」

アグルは何故か、嬉しそうに笑いながら。

「あはは、そうか、そうか。まあこれは役得ってところか」

何故かアグルは納得したように笑っていた。

食堂に付くと、他の兵士達や作業員、研究員も交じって食事をしていた。

私は食事を持って来ると、いつもの場所に腰を下ろした。

この場所は私しか座らない。

偶に他の人が隣に座って話しかけて来るけど、次の日には何故か傷だらけで、他の席で食事を取っている。

アグルもトレを持って、私の隣に座った。何故か食器にはニンジンばかり入っていた。

「おいおいどうなってるんだ。野郎に睨まれるのは分かるが、配給のババアにもすげえ睨まれながら『フィオナちゃん近付く害虫か！』ってすげえキレられたんだが。」

しかも、ニンジン大量に入れられたけど、まったくここはお前に対して随分と過保護なんだな」

アグルは不貞腐れながらも、ニンジンを口へ運んでいた。

「ねえアグル。このまま私と居れば貴方はまたパイロットとして生きる事になるわよ」

私の言葉にアグルは不思議そうに「それがどうした」と返し、食事を続けた。

「俺はな、物心付いた時には既に銃を握り、人を殺していた。」

俺にとってそれは『日常』であり。フィオナにとっては『非日常』かも知れない」

私の顔を見る事無く、黙々と食事をしながら、彼は自分の生い立ちを話した。

「俺は家族の顔を知らない、生まれながらの戦争孤児だ。」

生きる為に銃を取り、無我夢中で生きて来た。

そして気が付いたら 傭兵になり、レイヴンとなっていた」

「今を生きる事に全力だった、自分が生きる為に沢山の人を殺した。後悔もしていないし、これから生き方を変えるつもりは無い、だからフィオナ。」

君が俺の 力を求めるなら、俺は君の為に戦おう」

それだけ言うとアグルは食事を全て食べきると、立ち上がり。

「俺はエミールと一緒にテストの続きをやるよ」

アグルはそれだけ言うと、食堂から出て行った。

私はため息一つ吐くと、ぬるくなった珈琲で喉を潤した。

突如、食堂のドアが勢いよく開かれた。

「フィオナ！ 帰り道が！ 分からねえ！！」

呆れながらも、私は残っていた珈琲を急いで飲むと、トレを片付け。アグルと一緒に研究所に戻った。

「第二回AMSテスト、試験ナンバー〇二五。高速射撃訓練……開始」

アグルはネクストのOBを使い、的に向かって距離を詰め、ライフルを構えた。

「当てられますかね？」

私はエミールに聞いた。

「まあ無理だろうな、まだデータは不十分だから暫定的だが、彼のAMS適正は低い。」

幾ら伝説的なレイヴンと言えども、ネクストとノーマルでは根本が違う。

彼ほどの腕だと逆に癖が付き。慣れるのに時間が掛かるのかも知れない」

「第一射目、右に三mずれました。第二射目……左に二m」

その後も三十発ほどOBを発動しながらの射撃を行ったが、記録は酷いものだった。

「クソッ!!」

画面に映ったアグルの顔はとても悔しそうだった。

「フィオナ、この後のテストは君に任せる。後でデータを私のPCに送っておいてくれ」

エミールは席を立つと、研究室から出て行った。

「アグル、次は武器腕でテストします」

その後も彼とのテストは続き。一通りのテストが終わる頃には、既に日をまたいだ後だった。

「アグル、私は仮眠室の方で寝るけど、貴方はどうするの?」

アグルは仮想コックピットから出る事無く。

「これ、もう少し弄っててもいいのか?」

私はその言葉を深く考える事無く答えた。

「ええ、好きなようにして結構よ、そちらからでもテスト内容は変えられるはずよ」

アグルはすぐにテストを再開したようだったので、私は仮眠室で横になった。

「パパ、今度は何処へ行くの？」

「フィオナか。パパはな、今から企業の偉い人と会うんだ。パパの研究がやつと実ったんだよ」

「？」

父は、はにかみながら「ははは、そうか、フィオナにはまだ難しかったか」

そう言い、母と一緒に出かけに行った。

「お見上げいっぱい買ってくるから、良い子で待ってるんだぞ。エミールに迷惑掛けるんじゃないぞ」

父は、私の頭をそつと撫でると、大きなカバンを持ち、玄関をドアを開けると、再び振り向いた。

「ではフィオナ、パパ行ってくるからな。なるべく早く帰って来るからな。エミール、娘を頼んだぞ」

私は父と母が見えなくなっても手を振り続けた。
私はエミールと一緒に父と母の帰りを待った。

だが、二人が 帰って くる事は無かった。

午前六時。古いプラスチック製のデジタル時計が鳴らす。

ピピピと喧しい音が部屋中に響き渡り、嫌でも目を覚ましてしま
う、寝ている時に大音量で起こされるのは不快極まりないが。

時間に縛られる事が多いので重宝している。

簡易ベットから起き、仮眠室の洗面台で顔を洗い、手櫛で髪を梳
かし、身だしなみを整えた。

仮眠室から出るとパソコンの画面で顔は見えないが、頻りにキー
ボードを叩く音が聞こえた。

規則正しいタイプ音を聞きながら、私は質の悪い珈琲を入れつつ
挨拶をした。

「おはよう、エミール。随分と早かったのね」

だが、返事は無かった、不思議に思った私は画面で隠れている人
物を確かめるべく回り込んだ。

「ん？ ああフィオナか」

私がエミールだと思って挨拶をしていた相手はアグルだった。
彼は誰が見ても分かるほど、疲れた目をしていた。

「アグル、貴方はまさか今までずっとテストをしていたの？」

驚きながらも彼に問いかけたが彼はすぐにそれを否定した。

「いや、俺が起きたのはさっきだ。フィオナが寝た後、切りがいい
所までテストしたただけだ」

「そうなの？」

私は彼のテスト工程がどの程度進んでいるのか確認するべく、隣のサブPCを弄った。

「試験ナンバー、八十まで終了？」

予定としては三日を予定していたテストをたった一晩で五十工程近くも終わらせたの言つの？

まさか、ありえない。

「そんな……それよりも、結果は」

私はテストの結果を表示した。

どれも優秀とはい言い難いけど、どのスコアも回数を重ねる毎に更新されている。

あれだけの工程をこなすだけでは飽き足らず、成績が振るわなかった工程を幾度となくやり直している。

使っているアセンはどれもバラバラで規則性は無い。

だけど状況に合わせて様々なパーツを使っている。

ネクストとリンクスは言わば一心同体、ネクストは身体でありリンクスは頭脳。

身体であるパーツをそんなにもコロコロ変える事は通常はしない。いえ、出来ないと言った方が正確かもしれない。

だけど、彼は、そんな低いAMS適正を補うために、状況に合わせたアセンブルを行なうという形で補っていた。

これは今までに無いパターン。

「アグル、貴方、これを一晩で行ったの？」

声が震えているのが自分でも分かっていた。

だけど聞かずには入れなかった。そんな緊張する私に対して彼は、

然も当然のように「ああ、結構大変だったけどな」そう言って、彼は立ち上がり、脱衣室に向かって行った。

彼がシャワー室に入り、蛇口を捻り、水が流れる音が聞こえる。私は、彼が一晩でやった事を急いでエミールに伝えた。エミールは電話口で、すぐに帰る。それだけ言い、電話を切った。私はシャワーを浴びたアグルと入れ替わりにシャワー室へ入った。

脱衣籠に服を入れ。シャワー室に入り、熱いシャワーを浴びた。

「懐かしい夢」

首に掛かっているネックレスを見つめながら呟いた。

今朝見た夢の所為で頭は妙に冴えていた。

丁寧に髪を洗い、その後身体をゆっくりと洗うと。

髪と身体を拭き、下ろし立ての服に袖を通し、脱衣所から出た。

脱衣所から出るとアグルの姿は無かった。

研究所の中を隈なく捜すが、彼は見つからなかった。

何処かへ出かけたかと思ったが、その痕跡は無かった。

まさかと思い仮眠室へと入ると、彼は私のお気に入りのブランケットに包りながら寝ていた。

「……」

私は慌てて彼を起こそうとしたが、彼はどんなのゆすつても起きようとしなかった。

仕方なく、私は起こすのを諦め。

こんなに揺すつても起きないので、傭兵失格なのでは？　　と思いつながら。私は仮眠室から出た。

仮眠室から出て、私は椅子に腰かけ、昨日、自宅から持ってきた父の資料に目を通した。

「AMS……」

父はこの技術を身障者の為の義肢を作る為に研究していた。

当初、父の作った義肢を使える人は数少なかったけど、それでもいつかは誰もが使えるようにと父は研究を続けた。

だけど、そんな父の研究に強く興味を持ったのは、軍産企業だった。

沢山の企業が、父に技術提供を依頼していたが、父はけして首を縦には振らなかった。

企業は人を助ける目的ではなく、兵器としての使用を考えていたからだ。

頑なに技術提供をしない父に、企業は強硬手段を取った。

父と母が暗殺され、父であるイェルネフェルト教授の死後、その技術はコロニー『アスピナ』へ流失した。

それから五年間、この町、コロニー『アナトリア』は衰退の一途を辿った。

教授の死後、コロニーの全権はエミールが担い。

彼のおかげで何とか持ち直す事は出来たが、それでもこのアナトリアが危機に瀕しているのには変わりはない。

エミールの指示でアナトリアもネクストの研究を始めた。

技術研究用のネクスト

そして、突然現れたリンクス（繋がる者）。

その二つが合わされば、どんな事になるのか、今思えば容易に想

像がついたはずだった。

一度、羽を？がれた鴉^{レイウ}は、もう一度立ち上がろうとしていた。

END

第一話『鼓動』（後書き）

この作品は更新が気ままにやるという予定ですので気長に待って頂けると嬉しいです。一応隔週あるいは月間を予定としています。

AC4のストーリーについては、ニューオーダーオブネクストなどにも色々書いてありますが、基本的にはオリジナルで書きます。

……ええ分かってますとも本当はAMS適正があると分かるまでの間、主人公がフィオナ宅でヒモ生活とか……だけだな！ 羨まし過ぎて指が震えてまともに書けなかったんじゃないやあ……

第二話『初陣』？

初陣？

「エミール……それは冗談？ 本気だったら笑えないわ」

エミールの言い放った内容が気に食わず、私は食い下がるようにして強い口調で言った。

「ああ本気だとも、もう研究だけでもアナトリアは持たない、これからは彼に働いてもらう」

然もそれがふつうの事だと言わんばかりに、エミールは淡々とそう言い、話を続けた。

「確かに彼はAMS適正は低い、だが彼は現にネクストを動かせる。」

それに実は彼がAMS適正があると分かった後、私はGA（Global Armaments）の本社に出向いていたのだよ」

「何故？」

「彼をGAに傭兵として売り込みに行った。」

元々他の企業よりネクスト戦力の少ないGAだ、快く迎え入れてくれたよ」

確かにGAは他の企業と比べて、抱えているネクストの数が少ない。

粗製リンクスでも喉から手が出るほどに欲しいはず。

「そんな……彼をまた戦争に巻き込むの!？」

「元より君も彼をパイロットとして利用しようとしたはずだ、それと何処が違う?」

「違うわ、私は彼を戦争の為では無く、研究の為に協力して貰おうと思っただけよ!」

私の言葉の何処が面白いのか分からないが、エミールは突如笑い始め。

「ははは、フィオナ。君だって一滴の血を流さずにアナトリアが復興できると思っではないだろ？」

分かっているはずだ、もう彼を使わなくてはアナトリアに未来は無い」

分かって、ええ、分かっていますとも。

もうアナトリアが限界なもの、これ以上状況が悪化すれば暴動だっ
て起きかねない。

そんなれば今度こそアナトリアは終わり、そんな事分かっている、
だけど……それでも。

「俺は戦うのは一向に構わないぞ」

アグルの声に私達は振り向いた。

フィオナ違って、エミールは扉の前にアグルが居たことにはまるで驚いていない様子だった。

フィオナやエミールの顔を見た後、背中
で扉を閉め。ゆっくりとした歩みでこちらに
来た。

「働かないと飯も食えない、それにどうせ働くなら自分が得意な物で稼ぐのが一番じゃないか？」

「食事から帰って来ていたのか。」

アゲル君も人が悪い、そんなにも聞いていたのだったら、初めから入ってきてくれたらいいものの」

その言葉にアゲルは肩を竦め、首を振った。

「どうも仕事柄、騙され、利用される事が多いんでね」

彼は私の方を見ると。

「それに俺は言っただけで、君が俺の力を求めるなら、俺は君の為に戦うと。それに嘘偽りは無い」

それだけ言うと、フィオナの隣に腰かけた。

私はため息を一つ吐き、彼の眼を見た。アゲルの眼はとても自信にあふれたものだった。

まるで自分の台詞に酔っている様子だった。なので此处で一言言っておく事にした。

「前は言いそびれたけど、その“臭い”台詞はどうかと思っわよ」

アゲルはひどく驚いた表情をした。

「……………。ゴッホン！　そうか今度からは気を付ける。」

まあ俺が言いたい事はだなフィオナ、俺は傭兵だ。そして君が俺の雇い主だ、その間に遠慮はいらない」

そう言いながらアグルはエミールの手元にあるG Aとの契約書を手を取った。

その行動にエミールは少しも驚く事無く、彼が読み終わるのをじっと待っていた。

「ふーん、随分と報酬もいいな。これなら俺は文句は無い。俺への報酬は全てキャッシュでくれ」

エミールは二つ返事で答えると。

アグルもエミールに契約書を返し、アグルは私を一瞥するとそのまま仮眠室へと向かって歩き出した。

「腹もいっぱいになったし、俺はもう少しだけ横になるよ」

「待ってアグル」

何故か彼は嬉しいそうにこちらを振り向いたが、そんな事はどうでもいい、

私には彼にどうしても伝えなければいけない事が一つある。

「何だフィオナ」

「私のブラケットは使わないで、男臭くなるわ」

アグルは何も言わず仮眠室へと入って行った、その背中中は心なしか悲しそうに見えた。

「……思っていたよりアグル君は繊細なんだな」

エミールは然も、まあ自分には関係ないが、と言いたそうな顔で

残りの珈琲を飲んでいた。

第二話『初陣』？

初陣？

独立計画都市グリフォンを占拠する、武装勢力を排除する
グリフォンはかつて、大規模テロにより基幹インフラを失い、廃
棄された。

敵は、都合よく、そこを根城にしているにすぎない

この作戦は、アナトリアのネクスト、即ちキミの、パックスに対
するプレゼンテーションだ

特に、パックス最大の企業体、GAは、グリフォンの復興を計画
している。

連中にアピールするには、またとない機会だろう。

状況はできあがっている、あとはキミ次第だ、よろしく頼む

「以上がGAからの依頼内容です」

私は画面越しに出撃直前の最終確認行っているが、アゲルは欠伸
をし、緊張感がまるで感じれない。

既にネクストに搭乗し、後は降下ポイントに到着次第、出撃なの
にも関わらずだ。

「アゲル、聞いているの？」

画面越しとはいえ、彼は私の眼を見る事無く適当に返事をした。

「エミールも何か言ってあけで！」

だが、エミールも特に期待も緊張もどちらもしておらず、どちらかと言えば無関心と言ったところだった。

「まあこの程度の任務がこなせないのであれば、その程度の男だった……それだけだ。」

それに正直言つてこの任務はたとえアグル君がノーマルだとしても成功する確立が高いだろう」

「フィオナは心配し過ぎだ、俺はネクストに乗っているんだPAもある、心配は無用だ」
「ライマルアーマー」

「作戦予定ポイント、降下準備に入って下さい」

輸送機のパイロットが機械的に私とアグルに伝えた。

「作戦開始よ。敵主力、ノーマルをすべて撃破して」
了解

彼のネクストが地上に降り立ち、まずは周辺の戦車やMTの撃破に向かった。

「周辺の敵反応無くなりました、次のポイントに移動してください」

特に目立ったミスも無く、機体の残りAP九十五%と、ダメージは五%程度に抑えられている。

GAの中量型のパーツで構成されたネクストは確かに実弾防御も高く。

PAがあれば戦車の火砲程度でも表面に傷が付く程度のダメージしか受けない。

「アゲル、（ネクストの）違和感はない？」

彼はネクストの腕を少し動かすと

「違和感って言うか……外装に武器、それにジェネレータまでG Aで固められるとは思わなかったぜえ。

嬉しい事に予備武装までG Aのハンドガンだ……

それに付け加えてバズーカの接近適正が低くて、射撃に致命的な影響が出てるぞ」

彼のネクストはブースター以外は総てG A社で組まれていた。その機体は重く、攻撃も大味だった。

「元々あった技術研究用のネクストではとても実戦には耐えられないのよ。

だからG A社からパーツを譲ってもらったのよ。

それに、一度も使わずに他企業のパーツを使う訳にも行かないでしょ」

「だからってこの性能だったら少し早い程度のノーマルじゃないか。P Aが無かったらノーマルに乗りたいくらいだ。まあ一回だけならいいか」

「敵ノーマルを確認。作戦目標よ、撃破して」
「ノーマルか……」

彼は一瞬複雑そうな顔をした。

「ACネクストとAC……悪く思っなよ、お前らには適正が無かった、だが俺はある」

OBを使用し、一気に距離を詰めると、接近適正の低さからロックがおぼつかないバズーカを無ロックでノーマルに向かって構えた。

次の瞬間にはノーマルが炎に包まれていた。

「呆気ないな、これが次世代ACの力か」

残りの三機も碌に抵抗する間も無く撃破された。

「敵ノーマル、すべて撃破。 作戦成功よ、残敵には構わなくていいわ、帰還して」

ガダッ

突然、エミールは、席を立つと

「フィオナ、今回の弾薬費と修理費を計算しておいてくれ。私はG Aのお偉い方と話をしてくる」

そう言い、エミールは出て行った。

そしてエミールに頼まれていた作業を行なっていると、研究室の扉が勢いよく開き、後ろを振り向くと任務から帰還したアグルの姿があった。

彼は研究室の中を見渡し、私を見つけると、嬉しそうに歩み寄ってきた。

「ふう、フィオナ。どうだった俺の戦いっぷりは！」

「随分と早いね。これが今回の任務の報酬で、こっちが費用よ」

アグルは私から報告書を受け取ると、それに目を落とした。

「……なあ、この『ブランケット再購入費五百C』って何だ？」

「ああ、それは貴方が私の愛用のブランケットを使った事により、商品として致命的なダメージを負った。

だから再度購入する事になったの、その費用よ」

「はっ！ ……す、すまん！！」

俺が『爆睡によって唾液まみれ』にした事も『フィオナの匂いだハアハア』ってした事も謝る！」

「！？ 最初はともかく最後のは初耳よ！！」

「だがな！ 五百Cは高くないか！？ 成人男性が半年は遊んで暮らせるぞ！」

そして彼は、半ばその行いに引いている私に対して、更に言葉を続けた。

「まあ、貰える金に関しても、元より全額お前に渡すつもりだったから良いが、その……」

アグルは私を見つめ、何やらモジモジとしながら、何故か意味ありげな視線を向けていた。

「……その何だ俺『達』の大切な金なんだから、大切に使わないと」

「何？ その『達』って？ 達って誰を含めているの？」

「それを俺の口から言わせるのか！？ まったく我儘^{わがまま}なフィオナなんだな」

「……………」

「俺達の将来の為のお金だろ？ 結婚資金とか、今後の為に貯めて置かないと」

私は今だ彼の手元にある報告書を乱暴に奪うと、そのまま椅子の向きを変え、パソコンの方を向いた。

「なあ、フィオナも照れるなって。俺達は出会ってくしくして出会った。これって運命だろ？ 俺、フィオナに初めてあった時から、こうなんだ……。」

シンパシー的な何かを感じてたんだよ！ これって愛だろ？」

私は画面から目を逸らす事無く、彼を無視した。だけどアグルは更に言った。

「俺が疲れてソファで寝ている時にフィオナがブランケットを掛けてくれたのを俺は知っているんだぜえ。」

あれってやっぱり、愛だろ？」

私は呆れながら、彼の方を向くと、彼はサムズアップをしながら思いつきり爽やかな顔をするが。

きつと私はその正反対だと思っほど、思いつきり嫌そうな顔をしているのだと思う。

「なあ、フィオナ、キスしていいか？」

「したいならどうぞ」

私はそう言いながら、机の引き出しに仕舞ってあったハンドガンを彼の腹部辺りに向けた。

「うつ……そつ、それも愛情の裏返しだと俺は思っているぞ、あははは」

彼は椅子から立ち上がると、ぎこちない挙動でソファーの方に歩き出した。

そんな彼の背中に向かって、私は更に言った。

「ああ、それと貴方が寝ている時にブランケット掛けたの、エミールですよ」

「うわあああああ！！！」

私は、嘆く彼の声をBGMに画面の方を向き直り、再び作業を続けた。

彼はそのあとソファーの上で小さく丸くなりながらブランケットに包まり、^{すす}啜り泣いていた。

あのブランケットはエミールの物だと言ってあげた方がいいのだろうか？

そんな事を思いながら作業に没頭した。

第二話『初陣』？

初陣？

作業が一段落し、キーボードから手を離すと、冷め切って苦くなつた珈琲を飲み干し立ちあがつた。

ふとソファ―に目を向けると、先ほどとは打って違って彼は静かに寝ていた。

連日のテストとネクストによる初めての实战でよほど疲れがたまっているのか、不自然な態勢で寝てた。

上半身はソファ―からはみ出し。

ほとんど頭を床に擦りつける形で寝ていた頭を靴でほんの少し突くと、

彼は寝苦しそうに顔を歪めた。

あまりにも爆睡しているので外へは一人で行く事にした。

上に羽織っていた白衣を脱ぎ、財布がポケットに入っているのを確認すると、そのまま外へ出た。

最近は研究室と基地の食堂しか行き来していなかったので、外の風がやけに気持ちよく感じた。

生憎、天気は快晴とは行かないものの、気温自体はとても高いように感じた。

白衣を着てたら汗を掻いてしまうほどだ。

もちろん、外に出たのはけして気分転換の為なんかじゃない、せ

つかくなので外食をしようと思っていたのだ。

基地の駐車を抜けて、門兵に軽く挨拶を交わし、その隣を大型のトレーラーが行き来していた。

そのトレーラーと入れ替わりで軍用の乗用車が私を抜かして言った。

乗用車を一瞥し、再び歩き出したが、

その乗用車は突然ブレーキを踏んだのか、目の前で停止した。

「フィオナか？」

止まった車のドアが開き、そこから長身の男が降りてきて、その声を掛けて来た。

一瞬誰に話しかけているのかと思ったが、私はその男の声に聴き覚えがあった。

サングラスを掛けていたので誰か分からなかったが、男は私の前に立つと、サングラスを外した。

「…… ジョシュア・O・ブライエン」

私がそう呟くと彼は嬉しそうな顔をした。

「覚えててくれていたか、それよりエミールは居ないのか？」

先ほど研究室の方にも寄ったが、誰も居なくてね。君とは入れ違いになったようだな」

どうして貴方がここに居るの？ そう言いだしそうになったが、言葉を飲み込んだ。

「エミールは今、GAの重役の方とお話中よ、もう結構な時間が経

ってるのだけれど、まだ終わって無い様ね」

ジョシユアは少し困ったような顔をしていたが、腕時計を見ると何か思いついたのか口を開いた。

「フィオナ、今から昼食か？　もしよかったら俺と一緒に食べないか？　少し話したい事もある」

「……ええ、良いわよ」

彼の誘いを受けると、私は彼の車に乗り込んだ。

車の中は冷房が過剰に効いていて、正直寒かったが、それほど長い時間乗車しないのでじっと耐えていた。

車中では終始「元気でやっているか？」「飯はちゃんと食べているか？」などと、

まるで母親のような事を言われた。

レストランに着き、車から降り、店に入るとウェイターが席まで案内しメニューを私達に手渡すと、
その場から離れた。私はメニューを開く事無く、テーブルに伏せた。

「ん？　もう決まったのか？」

「ええ、この店は何度も来てるもの」

メニューを閉じた時は、不思議そうにしていた彼も、納得が行ったのか、再びメニューに顔を伏せた。

そして幾ばくかの時が過ぎ。

「よし、俺はこれにしよう」

彼はウェ이터の方を見ると、手を軽くあげ、呼び寄せる。

手短に注文すると、ウェ이터は頭を軽く下げると、厨房の方へ歩いて行った。

私も彼も、その姿を目で追い、姿が見えなつた所で、彼が再び口を開き

「それでフィオナ。少し小耳に挟んだのだが、君達アナトリアが独自のネクストとリンクスを所持していると」

私は彼の話に対して、一瞬誤魔化そうと思ったが、ジョシユアが何の確信も無しに、このような事を言うとは思えられなかった。

彼は知っている。故に、聞いた。

下手な嘘や誤魔化しでは意味がない。

どうせ、あのミッションでアグルの実力を認めたGAが、近日中には、

“GAに新しいネクストとリンクスが加わった”と、正式発表をするはずだ。

「何処でその話を聞いたか知らないけど、事実よ。」

私達はGAに取り行つてネクストを譲ってもらい。その見返りとしてGAからの任務を請け負う」

「ふむ、だが、では君達は傭兵稼業で生計を立てるのか？」

「そうよ、貴方と同じね」

「だがなフィオナ、傭兵と言っても、企業にとってはいいのいい捨

て石だ。

危険度の高い任務に自分達の兵は使いたくないからな。
だから企業はその様な任務ばかりを君達に回すぞ？

君達が困っているリンクスが余程の実力者かそれとも一国王並みの幸運の持ち主か、
そうでなければ生き残れない」

私はジョシユアの眼を見ながら。

「分かっています。だけど、私達……いえ、このアナトリアが生きていく為には、もうこれ以外の方法がないの」

彼にそう告げると、彼は半ば呆れているのか、肩を竦め、首を振り、そして向き直り。

「君達のリンクス、アグルだったか？ 戦闘の様子は見せて貰ったよ。確かに実力ある」

「だから」

「だが、並み程度だ」

私の言葉を遮り、更に言った。

「先ほども言ったが、並み程度の実力では生き残れない。
それとも君は、彼の実力では無く、運に期待しているのか？ それなら別にいい。

ギャンブルが好きなら止めはしない。だが君は違うのだろ？」

「」

「……、俺だって分かっている、君達がそうしなければ生き残

れない事も」

「じゃあどうすればいいのよ!」

「昔も言ったが、アスピナに來い、君と教授くらいなら俺の力でも、」

パンツ

渴いた音が店内に響き、フィオナが声を張るようにして大きな声で言った。

「父の研究資料を盗み、アナトリアを死地へ追いやった張本人が何をッ!!!」

「……いきなりビンタとは、随分と恨まれたものだ。

今更取繕うなんて事は思わないが、これだけは聞いてほしい。仕方無かったんだ……」

今更彼を責めてもどうにもならない事も分かっていた。アスピナとアナトリアの両国共同の一大プロジェクト。

父とジョシユア、それにエミールは共同でAMSの研究をしていた。

当然その研究成果はアナトリアだけのものでは無かったのは分かっている。

父の死後、窮地に立たされたのはアスピナも同じ。

その研究成果を企業に売り渡し、コロニーの立て直しを図りたいのも分かる。

頑固として研究成果を企業に売り渡す事を善しとしなかった父。

そんな父の好き理解者であり、信頼していた友人の一人であるジョシユア。

そんな彼が企業に研究成果を売り渡した張本人と知れば父がどんな顔をするか……。

「お待たせ致しました。こちらが、」

気まずそうにウェイターがテーブルに料理を並べると、足早に去って行った。

その後、食事をする間、終始私達は無言だった。

彼はトイレへ行くといい、席を立ち、さり気無く会計を済ませ、席へ座った。

「借りなんて作りたくありません」

私はお金をテーブルに置き、彼の顔を見ずにそのまま、店の外へ出た。

彼が呼びとめる声が聞こえたが、それを無視し、そのまま来た道を歩いて帰り始める。

「待てフィオナ、先ほどの事は謝る。とりあえず車の乗ってくれ、基地まで送る」

「そのエアコンの効きすぎの車に乗るなんて御免よ」

「それなら大丈夫だ！ さっきまで屋外に居たから、中はサウナ状態だ」

「尚更嫌よッ！！」

「そんな事より、ここから基地まで結構あるぞ。
そんな高いヒールで歩いたら君の綺麗な足に肉刺^{まめ}が出来てしまう」

大きなお世話、と言ってやりたかったが。
正直、ここから基地までの距離を思うと、これ以上意固地になっても得が無いと思い渋々車に乗り込んだ。

第二話『初陣』？

初陣？

「……………」

「……………」

また口を開けば、私が降りると言いかねないと思っているのか、彼は車中何も話さなかった。

「此処までいい」

基地に少し入ったところで、私は彼にそう言い、強引に車のドアを開けた。彼も私の行動に驚き、あわてて車を止めた。

「俺はこれから車を置いたら、もう一度エミールを捜す。

きっと君の研究室の方にも寄ると思う。

研究室の方が居る確率が高いだろうし、それに君達のリンクスにも一目会いたいからね」

「そう」

彼の方を向かずに、短く答え、研究室に向かった。

研究室に入ると、その中は昼食に出る前と何ら変わり無い光景が広がっていた。

アグルがブランケットに包ってる所でさえまったく同じ……いえ違うわ！ あのブランケット、私の……！！

「ちょっとアゲル！　なんで態々私のブランケットを持ちだしてるのよ！」

彼の魔の手から逸早く私のブランケット二世を回収する為に、必死に彼との楽しくもない綱引きが行われる。

「うおっフィオナか！　おい、ひっぱるなって！　お前が何枚もこれと同じの持つてる知ってるんだぞ！」

だから一枚貰おうと思つてな」

「何枚も持っているのは、貴方にあげる為じゃなくて、この種類じゃないと落ち着かないからよ！！」

洗濯とかする時に“困らない用”に何枚も予備を持っているだけのの！　それに前に一枚貴方にあげたでしょ！」

「あれはフィオナに返すよ、だって俺の匂いしかしねえもん」

「“返す”って何よ！　要らないわよあんな男臭いの！」

「なんだと！！　俺はフィオナの匂いを嗅ぎながらだと安眠できるだよ。」

だからフィオナも俺の匂いの付いたブランケットできっと安眠だつて！」

「今のままで十分快眠です！」

「いいじゃねえか何枚も持つてるんだろ？　一枚くらいくれよ！」

「そんなティッシューパー見たいに何百枚もありますんッ！」

やっとの事でブランケットを取り返した。

「なんだよ、そんなにいっぱい持つてるのに一枚もくれねえとか、傲慢な女だな」

「どつちがよ！」

肩で息をしながらも、私は腕の中にあるブランケットの生死確認をした。

「……………」

「おい、そんな冷たい目で見るなよ、恥ずかしい」

「」

正直、追い出してしまいたい衝動に駆られたが。

既に、私達にとって彼は必要な存在になってしまっている為に、そんな事を出来るはずもなく。

渋々私は既に死亡（彼の匂いが染み着いた）したブランケットを彼に返した。

「うわーい」

海よりも深いであろう溜息^{ためいき}を吐き、自分のデスクの椅子に掛けた。

「随分と仲が良さそうだな」

声のする方に視線を向けると、そこにはジョシユアが居た。

「すまない、ドアが開いていたんでな、まあノックはしたが……」

「仲良くなありませんよ、とりあえずそこに掛けたらどうですか？」

私はジョシユアにアグルの隣に座るように諭した。

「おいオッサン、ここは俺のソファーだぞ」

「あんたのじゃないでしょ」

「ははっ、これは失礼、すまないけど半分借りるよ」

「何か飲みます?」

私は席を立ち、冷蔵庫の方に前に立ち聞いた。

「おれオレンジジュース!」

「自分で取りなさいよ」

「自分で取れてよ、おっさん」

「貴方に言ったのよ!」

「えー」、と明らかに不満そうな顔をしたアグルを無視し、改めて
ジョシユアに聞くと。

彼は、結構、と短く返事をし、断った。

始めは遠慮しているかと思っただが、どうもそうでは無さそうだった
ので。

私は自分の分だけコップに牛乳を注ぎ、再び席に着いた。

「それで、エミールとはもう話したの?」

「ああ、先ほどやっと折り返しの電話があつてな、必要な事は全て
話した」

「ふーん。だけど、それならもう用事は片付いたでしょ?」

「確かに重要な用事は片付いたが、もう一つ用事があつてね」

「アグル君と言っただけ?」

急に話を振られた事に驚いて飲み物が気管支に入ったのか、咳き
込むアグル。

……あれ？ あれは私がさつきコップに注いだ牛乳では？

「ゲッホ、ゲッホ。まったくいきなり話振るなよ。」

牛乳だけでは“乳はでかくなならない”とか、色々と好からぬ事を考えていたから驚いたじゃないか！」

「？ それよりもだアグル君。君は元レイヴンだと聞いているが…… それは本当かな？」

「ほう、おっさん。それ何処で聞いた？」

先ほどとは打って変って、アグルは炯々たる眼光でジョシユアを見据える。

だが、その視線の意思を感じているのか分からないがジョシユアの雰囲気も変わった。

先刻とは違う、寒いくらいの空気。隣の席同士で座っているのに関わらず、お互いを酷く警戒している。

しかし、アグルとは違い、ジョシユアは幾分か余裕があるのか、胸ポケットに手をやり、タバコを取り出し。

いつの間にやら反対の手に持っていたライターで火を付けた。

互いに無言の中に流れる紫煙。

「随分勿体を付けるじゃねえか、おっさん」

「確かに、勿体付けるほどでも無いな。君の戦い振りは既に企業間では公開されている」

「既に多くのリンクスの眼にも届いているだろう。リンクスの時代に『レイヴン』が現れたと」

「へーもう有名人なのか、皆俺の存在に慄おののいてるのか？」

「まさか、その逆だよ、『どうして出て来た？』『時代遅れが何を

？』『所詮は雑種』など、意見は様々だが。

皆、君を動物園の珍獣程度にしか関心はないよ。皆、すぐに消えると考えている」

「おっさんもそう考えているのか？」

アグルの言葉に、ジョシユアは少し顔を下げ、考える素振りをした。

「うーん。先の戦い振りが君の本気なら、私としても生き残れるとは思ってはいないよ」

ジョシユアは席を立ち「それが本気だとしたらね」そう強く言う

と。
アグルの肩に手を載せ、軽くポンポンと叩くと、再びフィオナに
向き直った。

「私はもう一度エミールを捜しに行ってくるよ」

「その必要はないよ、ジョシユア君」

ドアの方から聞こえた声に、皆が反応し、振り向く。

そこに居たのはジョシユアが今まさに捜しに行こうとした、エミールの姿があった。

エミールはゆっくりとした口調で「もう一度掛けたまえ」と言い、
ジョシユアに席に着くように促した。

何も言う事無く、ジョシユアは席に着き、エミールもデスクから
キャスター付きの椅子を引いた。

それをフィオナの隣に付けると、静かに腰を下ろした。

「それで、電話ですべて要件は済ませたと思っていたが、まだここに居ると言う事は、まだ何か話すことがあるのだろうか？ 昔を懐かしむ為に来たのでは無かろう？」

「ええ、私が来たのは、彼。アグル君の件で来たのです」

エミールは軽く眉を顰め、そして、私の方を一瞥すると「珈琲を頼む」

と言い、ジョシユアの質問に答えるべく、口を開いた。

「知つての通り、コロニー“アナトリア”は未曾有の危機に瀕している。

今までは皆の協力もあつてか、大きな問題は無かつたが、と言っても表面化していなかつただけだが。

だが、それももう限界が来ている。

このままアナトリアが衰退の一途を辿れば、暴動が発生し、人々が傷つく。

それを私は防ぎたい。その為には力が必要だ、君にも分かつているだろう？

その力が彼だ」

エミールはそう言うと、アグルの方を見た。

その目は力強く、生きる気力というものを感じ取れた。

アグル自身も、凄む様な、それでいてまさに自分が希望と言わんばかりの視線を浴びせられ、やや居心地の悪そうに頬笑み、頬を掻いた。

ジョシユアは、照れるアグルを横目で見ると「随分と期待しているようで」と言い、更に言葉を続けた。

「確かに今までのリンクスの中ではアゲル君は異色ですが、それは物珍しいだけだ。

そして、今の企業は堅実で、より安定したパイロットリンクスを求める。AMS適正も低く。レイヴン時代が長い所為か、妙な癖も付いている。

研究テーマとしても面白いかもしれないが、その様な者を誰が欲しがる？

確かにGAは彼を拾ってくれたが、所詮は当て馬程度の扱いだ。GA自体もリンクスの保有数が少ない、故に他から調達するしかない。だから君は選ばれたに過ぎない」

「ジョシユア君の言い分は、分かった。だが、私達も苦肉の策だと言う事を分かってくれ。

今までは博打すら打てないほどの状況だった。賭ける物すら無いからな。

そんな私達に、与えられた最後の機会チャンスである、彼。

どうせ死ぬしかないなら、どんなに確率が低かろうと賭けるだろう。

確かに賭けに負ければ、もうアナトリアには生き残る術はないだろう。

故に私は賭ける。それが私の意志、アナトリアの意志だ」

まくし立てるようにして、エミールはそう言うと、私が入れた珈琲に口を付けた。

ジョシユアとしても、これ以上は反論も無いのか、口を開く気配は無かった。

エミールは、そんなジョシユアを見つめながら、珈琲を更に飲むと、言った。

「ジョシユア君が態々助言に来た事はありがたい事だとは思っている。」

だが、君は既に部外者だ。

友人同士で語らうなら一向に構わない。だがしかし、アゲル君の事や、アナトリアの事に関しては口を挟まないでくれ」

子供をあやすような、やんわりとした優しい口調だが、はっきりとした拒絶の意志だけはしっかりと口にした。

それ意味を知ってか、ジョシユアは「分かった」と言い、席を立った。

彼　ジョシユアは、一度も振り向く事は無く。

静かにドアを開くと、ゆっくりとドアを閉め、部屋から出て行った。

一同、沈黙する中、この沈黙をエミールが破った。

「そう言えば、アゲル君。ミッションは見事成功したみたいだね。おめでとう。」

G A本社では、君の戦い振りを高く評価しているよ。

私自身も、“あんな”機体でよくやったと考えている」

「『“あんな”機体』？　ああ、G Aから譲ってもらったネクストか。」

次回からはあれじゃなくてもいいんだろ？」

少しだけ考える素振りをするエミールだったが、すぐに「構わない」と短く返事をし、再び席を立った。

第二話『初陣』

E
N
D

第三話『伝説の英雄』？

『伝説の英雄』？

薄暗い部屋には青白く光る五十インチ近くのモニターだけが光を放っていた。

そのモニターには白髪雜じりのかっぱくの恰幅の良い男性の姿が映し出されていた。

男は機嫌よさそうに酒を呷り、それを近くにあるテーブルに置くと、意気揚々と口を開いた。

「わが社の製品はどうだったかね？」

「大変すばらしい性能です。ですがあの程度の戦力であれば、貴方達のノーマル部隊だけでも遅れをとる事はないでしょう」

「もちろんわが社だけでも対応は可能だったが、まともに正面からやりあつて被害を出すよりは、“粗製”と言えども、リンクスに頼む方が安上がりだ」

下品なほど大口を開けた大笑いをする、さらに酒を呷り、男は言葉を続けた。

「それに君たちに譲ったAC用パーツ……特に火器管制システムはわが社の方でも運用方法が見いだせないパーツだね。

せっかくだから運用テストの意味も込めて君たちに譲ったが、やはりロック速度に問題があると研究チームが言っていたよ」

やはり何かしら“問題”を抱えているパーツを掴ませたな……。

心の中でエミールはこの男を罵りながらも、それを表に出すことなく、笑顔で答えた。

「それで、“傭兵の有用性”についての今はどうお考えですか？」

「ああ、悪くはない。わが社　GAとしても自分達のリンクスは失いたくないからな。」

こう言っではなんだが、多少高くついても、危険度の高い任務で“傭兵”を使うというのは悪くない

だがしかし、失敗しては意味はない。今後君たちに頼む機会もあるだろうが、しくじらないと良いが」

不気味で気味の悪い笑みを浮かべ、男は画面外に視線を移し、隣にいたであろう給仕が何かに酒を注がせた。

「『大丈夫です』などと言っても信用はできないでしょう。」

これに関しては、どんな言葉を並べても無駄ですね。今後の行いのみが証明してくれるでしょう」

エミールはそのあと社交辞令程度の言葉を交わし、通信を終えた。

「私たちのリンクス。そして最後の鳥は、一体どこまで高く飛べるか……」

一言つぶやくと、モニターの電源を切り、席を立ち、その場を後にした。

第三話『伝説の英雄』？

『伝説の英雄』？

巨大なモニターには二人の男性と、一人の女性の姿が映し出されていた。

今この会議に参加している誰もが、世界に対して、影響力を持っている者たちの一人だ。

見るからに頭の切れそうな者もいれば、逆に気の抜けたあくびをする者もいた。

現在、会議の中心となつて話を進めている男。GAグループの長であり、GAアメリカの社長である男は先ほどエミールと話した時とは打って変わり、真剣な目つきでモニターの向こう側に居る者たち語り掛けた。

「彼がリンクスナンバー39の『エスガー・レインウオーター』だ。皆さんも知つての通り、彼は有名な“レイヴン”。そして国家解体戦争の生き残りだ。

それがどういふ訳かAMS適正があり、今はネクストのパイロットをしている」

男の言葉に興味津々といった表情の者が一人。

まだ三十代中ごろだろうか、グレーのスーツに赤いネクタイ。

そして何よりも特徴的なのが、銀色の髪。それをオールバックに固めていた。

鋭い眼光で資料に目を落としながら男は問う。

淡々と気持ちも無く、機械的に言葉を放つ彼だったが、思いなしにその口元は嬉しそうに頬を緩めているように見えた。

「ほお、レイヴンの生き残りにAMS適正があるとは、実に興味深い。それで、実力のほどはどうなんだ？」

「まだ情報不足だが、現状では『使える』程度。毛色が違うだけで、ほかに目立った特徴はない」

「情報に関してはコロニー、アスピナの傭兵 ジョシユア・O・ブライエンがレイヴンと直接接触したと訊いたが？」

問いに答えると、今度は女性が口を開いた。

この中では唯一の女性であり、そして一番若い人物。

そんな若輩者がイクバールグループをまとめ、イクバール社の社長をしているのだから驚きだ。

彼女をよく知らぬ者からは、その美貌で、今の地位を奪い取ったのだと謗^{そし}られた。

だがしかし、彼女は体ではなく、その類い稀なる“発想力”という武器を使い、瞬く間に会社を大きくした。

その証拠に、イクバールのパーツはどれも他社とは異なるコンセプトな物が多かった。

「……？ それは初耳ですなあ。それに関してはローゼンタールの方が詳しいのでは？」

椅子に深く腰掛け、興味なさげに天井を見上げていた男が、突然の振りにも驚く様子もなく、淡々と答えた。

「……そうだな、オーメルから間接的に聞いたただだが、確かにジョシユアがアナトリアの傭兵と接触したと報告を受けている。」

「だがな、俺はそれよりも、一つ、気になっている事があってな」
「ほう、それはなんですか？」

「どうしてその女狐、アンタが　イクバル社の貴方がジョシユアが『アスピナの傭兵』だと決めつけて話しを進めているのが気になる」

その言葉に女性は、しまった、と言った表情をした。

男はその表情を見て、今後は情報漏えいが無いように気を付けねば、と考えながらも言葉を続けた。

「まだ正式に申請は出してはいないはずなんですがねえ……まあいい、いい機会だ。ここで言わせていただこう。

ローゼンタールグループの『オーメル・サイエンス・テクノロジー』の援助により、コロニー『アスピナ』　ジョシユア・O・ブライエンをリンクスとして登録願いたい。

まあ、あの女狐が言っていた通り、“傭兵”としての申請だ。なので我が社に直接加わる訳ではない」

断らないと分かっているのか、男はそれだけ言つと、再び背もたれに体重を乗せ、つまらなそうに天井に目を移した。

「分かった、もちろん私は異論はない」

「……私もよ」

「俺も構わない」

「インテリオルとBFFはここに居ないが、すでに三社が同意しているのだ。登録しても問題は無かろう」

こうして、リンクスナンバーに『39』と『40』の二名が加わ

った。

その二名がこの後、《世界》を変えていくとは、この時、誰が予想できただろうか。

第三話『伝説の英雄』？

『伝説の英雄』？

「作戦を確認します」

モニターの青白い光がアグルの顔を照らす。

大型輸送機のハンガーに収まっているネクストには、作戦領域に入るまで冷凍処理が施される。

それはコジマ粒子を大量にまき散らす《死の兵器》をとことろ構わず起動させない為のルールのようなもの。

今から行われる作戦に備え既に解凍は始まっており、今まさに作戦の最終確認を行ってる途中だった。

「ホワイトアフリカ最大の反体制勢力、マグリブ解放戦線の、旧ゲルタ要塞を強襲します」

「ホワイトアフリカって言うと。ネクストを二機も所有しているレジスタンスだろ？」

「はい、強力な兵器であるネクストを二機所有しています。ですが、今回の作戦で敵のネクストが出てくる可能性はありません。安心して作戦に集中してください」

「了解だ。要塞の防衛部隊が目標だよな？」

「目標はノーマルだけで他は無視して構いませんが、峡谷に設置された旧式の大口徑固定砲は、長射程に加え、高い威力を誇ります。この事だけは考慮した上で作戦に当たって」

「了解した。発進する」

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

着地し、まずは敵の位置を把握しようと思っていたが、そんな考えは長距離砲撃で爆撃と共に吹き飛んだ。

「思ったより射程距離が長い……。仕方ないもたついて居ても被害が増えるだけだな。OBで一気に駆けるッ！！」

現在のアグルのネクストは、敵の攻撃などまるで考慮されていないほど装甲もPA^{プライマルアーマー}薄い。もし大口徑の攻撃を受ければ機体は硬直し、更なる追撃を受ける原因となる。

だが、敵の厚い弾幕をまるで物ともしないほどのスピードで一気に駆ける。

途中見かけたMTや戦車は、脇目も振らず横か、頭上を通る。敵が反転し、こちらに銃口を向ける頃には、既にアグルの機体は

ロックが可能な範囲から外れる。

開けた視界の次には、そびえ立つ要塞の姿。

要塞と言うよりは建築途中の鉄筋造りの高層マンションに骨組だけしかないように見えるが。その上部には、最後の要と言わんばかりに四門の長距離砲。

もし、上部に備え付けられた長距離砲四門を同時に喰らうような事になればアグルの機体は大破する。

だが、今回の目標は敵長距離砲ではなく、あくまでノーマル。なら態々頭を上げ、砲台に喰われてやる理由もない。

それが分かっているから、地面を滑らせるように機体を移動され敵ノーマルを攻撃する。

すべて足が遅い機体で構成されており、無意味に弾薬も消費してやるのも癪うざなので、左手に備え付けたブレードを構える。

敵がバズーカを構えるが、その横をQBクイックフーストで通り抜ける。

アグルが目標にしていたのは先ほど横を通り抜けた敵ではなく、さらに後方に居たノーマル。

結果的に直線で並んでいた敵は、自分の味方が居たと思っていた前方には、次の瞬間ブレードの餌食となっていた。

「こんなところで直線で並ぶから!!」

もし、このままアグルが手前のノーマルをブレードで攻撃していれば、後方にいたノーマルのバズーカを喰らう事になったかもしれないが、当然そんなミスはしない。

レーダーで敵を確認し囲まれぬように、さりとて敵が密集し連携を取られぬようにと敵を分断するように動く。

圧倒的に戦いの歴が違うアグルにとっては、このような数的不利

結局、薄い装甲と薄いPAの一見危なげに見えるアセンブルは、一度もピンチを迎える事無く、無事に任務を終えた。

「了解、帰還する」

[illegible]

アグルは日課である十キロのランニングを行っていた。

ＡＣに踏みつぶされかけるような失敗はしない。

この基地が住むようになって日が浅い時は、誤って射撃場のど真ん中を突っ切つて死にかけた事もあった。

いや、あれは『射撃場』の看板が倒れてたから悪いだ、俺は悪くねえ。

「今日も……精が……出るな、
“レイヴン”」

後方からの声に、アグルは振り返るのではなく、足を遅める事で答えた。

「悪いな……俺に……合わせてペース……落として……もらって」

「ああ、気にするな」

隣に並んだ事で話しやすくなった、と同時に走るスピードに物足りなさを覚えた。

朝からくどいほどの笑顔で話しかけてくるスキンヘッドの男。

基地の奴らから『面白黒人』と呼ばれている。

その男もアグルと同じで、早朝ランニングを好んで行っている。グレーのタンクトップは汗を吸い、全体的に黒くなっており、既に何十キロも走り終えている事が見て取れた。

「……それで……傭兵稼業の……方はどうだ？」
「ジェス、お前こそどうなんだ？ 今日はやけに息が上がってないか？」

今日はいつもより息が上がっているジェス。

既に返答をする余裕がないのか、更にスピードを緩める。

それはもう歩くようなペースであったが、いまさら気にすることでもなかった。

「ッ 駄目だ……これ以上はッ……」

「おいおい、止まっちゃったぞ？ どうしたんだ？」

「すまんすまん、明日と明後日は日課ができないからな。だから今日は“三日分”と思ってな」

「ん？ それは一体どうしてだ？」

ジャスは答え口にするのではなく、近くの蛇口に近寄る。

蛇口に接続されたホースを頭の上に持っていくと、蛇口を捻り、勢いよく水を出し浴びる。

「うつつ冷たッ。だが走り終えた後はこれがたまらんぜえ、お前もどうだ？」

「俺はまだ日課の半分も走ってないんだぞ？」

「そうだったそうだった！ まあなんだ、明日の件だが。」

俺の為に新しいノーマルを新調するんだ、エミール・グスタフ教授がな。GA社の機体を譲ってもらったらしい。

旧型のノーマルだが、今のアナトリアでは最新型。それを俺に任せてくれるらしい」

「その旧型はどこにあるんだ。第二倉庫か？」

第二倉庫、正確には 第二整備倉庫。主にノーマルが置かれている第二倉庫の方をアグルは見つめた。

ジャスも第二倉庫の方に視線を送るが、直ぐに「違う違う、機体はまだGA社の方にある」と言い、更に言った。

「午後から三人でGA社に出向く。もちろんグスタフも一緒だ」

その言葉でようやくアグルは理解した。だから今日は訓練も何もないのか。

この所、任務もGA社の初ミッション以外は、小競り合いのようなものばかり。

アグルはネクストでノーマルを撃破するような一方的なミッションは好かなかった。

元レイヴンとしての血がそう思わせるのだろう。

「エミールは居ないのか。じゃあ今日はフィオナと二人つきりか」

「緩みきつた気色の悪い笑顔で話してるところ悪いが、フィオナ嬢もこっちに付いて行くはずだぞ」

「はあっ!？」

ジャスの胸倉を掴むと、アグルは「俺も行く!」と凄むような視線で伝えた。

第三話『伝説の英雄』？

『伝説の英雄』？

GA社に出向くために窮屈なスーツに着替える。

「タイトスカートって体のラインが強調されるから好きじゃないのよね……」

そんなことを呟きながら着替えを終え

、一泊に必要な荷物と機材を詰め、部屋から出た。

研究室でエミールと合流し、基地内の滑走路でジャス・デュバルと合流した。

そして、GA社まで行くために専用のジェット機に乗り込んだ私達。

機長などの搭乗員などを除き、この機に乗るのは私含め三人だったはずだが、ジェット機に乗り込むと既に先客が我が物顔で席にいた。

私を呼ぶ声と共に彼は私に近寄り「あそこはフィオナさんの席」などとふざけた事を言いながら先ほどまで、自分が座っていた座席の隣を指を指していた。

呆れる私とエミールだったが、今回の主役と言ってもいい、ジャス・デュバルは苦笑い気味に頬を掻いていた。

興奮気味に私の隣に（勝手に）座っているアグルはまるでお話に

ならなかったので、仕方なく正面に座っているデュバルさんに説明を聞くことにした。

簡潔な説明を聴き、ようやく“理解”は出来たが“納得”は出来なかった。

「……それで、貴方までついて来たと？」

「てへ」

「『てへ』じゃないわよ！！ まったく来るなら来るってなんで事前に言わなかったの！？

G A 社の方にも“三人”って報告しちゃったのよ！！」

捲し立て、喋る私をまるで馬を御するかのよう「とどうと」とジャスが止めに入る。

「飯はそこらへんで買うからいいとして、問題は宿泊先だろ？
ならアグルは部屋に泊まってもらえばいい。それなら問題ないだろ？」

「えゝ。俺はフィオナと同じ部屋がいい」

「俺がフォローしてやってんだから、素直に俺と一緒に泊まるってところで妥協しろ」

「デュバルさんがそれでいいって言うなら私は別に……」

「おい、ジャスの言葉なら素直に従うのか！？」

アグルがそういうとフィオナは慌てて「ちっ、違うわよ！！」と必死な形相で反論した。

「そんなに必死に否定するところが余計に怪しい！ はっ！？ フ
イオナ、浮気は許さんぞ！！」

「貴方と私は婚約もしてないわよ！ それにデュバルさんとは今日が初対面！！」

ジャン・デュバルは「何度か話したんだけど……」と残念そうな顔を浮かべていた。

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

砂漠のど真ん中に作られたG A社工業都市 バリス
“都市”と言っても、砂上にコンクリートで地盤を作り、その上に建築物などを建てただけのお粗末な都市。

少し前までは、砂漠のオアシスとして行商人も盛んに行き来し、砂漠を横断するときの中継ポイントとしても使われていたが、今ではG Aの関係者などがこの都市の人口のほとんどを占めている。

ここまで人離れが進んだ理由の一つ。

ホワイトアフリカを中心に活動する反体制組織である マグリブ解放戦線 の出現が原因。

彼らの攻撃は計画的で居住区に被害を与えるような事はしなかったが、だからと言って、喜んでそこに住み続ける人間は居ない。

民間人が居ないこの都市は、結果的にバリスは都市と呼ぶより、軍事拠点と呼ぶ方がしっくり来るのかもしれない。

近くG A社はここを捨てる事を決定した。その事もあり今回、自身らで回収する事を条件に、廃棄予定であったノーマルをアナトリアに譲る話になった。

たった一機のノーマルかもしれないが。今のアナトリアには希少な防衛戦力と言えよう。

そして、今回貰い受ける予定のノーマルが格納してあるハンガーにはアグルを含めた四人と、忙しく働く整備兵の姿があった。

「GA社のノーマルにしては軽そうな図体だな」

私の隣で仰ぐように機体を見つめるアグル。

機体に視線を向けるのではなく、私は機体スペックが記載されている書類を淡々と読み上げた。

「GA社の多目的型ノーマル。 “GA08 TEMPESTAS”
テンペスタースの意味は“嵐”。
その名前通り、GA社には珍しく軽量をコンセプトに作られた軽量型ノーマルです」

一通り目を通した書類をジャス・デュバルに渡し、フィオナ自身も機体を見つめた。

大型輸送機を必要としないで輸送できるほど軽量に仕上がっているこのテンペスタースを、なぜ廃棄処分にする？

再利用できないほどのオンボロ機体かと想像していたが、この機体は一度も戦闘に使用された様子もない。

安易に輸送ができて、再利用も可能なほど真新しい機体。

どうして私たちにそれを譲るのか理解ができない……。

機体に致命的な欠陥？ 無理のない設計思想のGAが欠陥品を生産するとも考えられない。

それ以前に、この機体は果たして量産されているの？ いえ、私はこの機体を見た事はおろか、聞いたこともない。確かにノーマルは私と専門分野、と言う訳ではないが、各企業の量産品のノーマルくらいは把握している。

そんな事を考えていると後方から二つの声が聞こえてくる。

一つは聞き覚えがある。エミールの声。

もう一つは……。

声の主を確かめるべく、私は後ろを向いた。

「どうですか、テンペスターは？」

「まさかこんな新型を回してもらえうとは。譲って下さる機体はソーラーウィンドと聞いていましたが？」

ソーラーウィンド

GA03 - SOLARWIND。重量二脚型ノーマル。装甲は厚いが、駆動系やFCSは旧式な為、性能は……。

スーツ姿で白髪混じりの男。中肉中背で、一言で言ってしまう印象の薄い男性だった。

覚える気が無ければ、きっと後日名前を言われても、彼の顔をすぐに思い出す事は叶わないと思うほど影の薄い男性だった。

「この度は」

私は機体の方を見つめているだけの男性陣二人をよそに、私は短くスーツ姿の男性にあいさつをした。

「ご丁寧にも。私はヴィクト・クルプス。

GA社工業都市 バリス の支部長のようなものを行っているものです。

バリスでの最高責任者は私ですが、ここは砂漠の果て……あまり誇れるものではありませんね」

男は乾いた笑いを浮かべながら、話を続けた。

「この機体はですね。倉庫に奥に仕舞ってあっただけの実験機でし

て。碌にテストもしていませんし、替えのパーツもありません。安定した製品を大量に量産する我が社では、このような変わり種はもう不要と判断しましてね。廃棄という形になってしまいました」

男はそれだけ行つた所で私とエミールの顔を見て「ですが、品質には自信が御座います」と両手をブンブンと振りながら言った。

「確かにフルオーダーメイドのワンオフ品のような機体ですが、性能は従来の物と比べても引けを取らないと考えています！それに予定通りソーラーウインドも一機そちらに譲ります」

思いかげないほどの好条件。GA03、GA08の二機をこちらが回収するを条件に持ち帰る……。畏？いえ、例え畏だとしても、どういう目的で？

「とりあえず今日はこちらで止まって行ってください。そちらの回収機も到着はまだですよね？」

この都市では一番のホテルを用意しました。ハンガーの外に車を用意してあります。車の中の彼がホテルまで連れてつてくれます」

クルプスさんの言うとおり、アナトリアから発進した大型の輸送機は早くても朝方になるはずだ。

もともとそういう予定でもある。それを分かっているからあちらも宿泊先を用意したのだ。

「そのことですが……」

私が予定にないはずのアグルがついてきてる事を伝えようとしたが、エミールが手で遮り、少し前に出ると話始めた。

「はい、では私たちはこれで」

「輸送機が到着しましたらすぐに積み込みを始めます。あなた方の輸送機が到着する時間で多少前後するでしょうが、午後には準備が終わる事でしょう」

その言葉を最後に私たちは車へと足を進めた。

「アグル君……もう少し詰めたまえ……」

何故か助手席ではなく、後ろの席でアグルとデュバルさんに挟まれるエミール。

エミールが気を利かせた私を助手席へと回してくれたが、それに対して、アグルは不満そうに運転席の後ろで暴れていた。クルプスさんが用意した運転手も、後ろで暴れるアグルに苦笑いを浮かべながら困惑するように私の方へ視線を流した。

「すみません……」

何度となくアグルに注意をしたが、その度に喜ぶだけなので、既に私ができる事は、この運転手に謝る事だけだった。

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

「どうしたの二人とも」

朝、エミールと共に、ホテルで朝食を摂っていると、まるで寝不足と言った表情の二人がゆっくりと席に着いた。

アグルだけは必死に「おはよう……嫁……」とふざけた事を言っ

ていたが、それだけ言うとアグルも黙り、給仕の人に二人とも「ホット珈琲」とだけ伝え、黙り込んだ。

「二人とも寝不足か？」

「グスタフ教授……それはですね……」

デュバルさんか言うには、どうやらアグルと彼は、どちらがキングサイズのベットで寝るか揉めた挙句。

筋トレの回数を競うという種目で白黒をつけようとしたが、どちらも自分の必死に回数をこなすうちに、何回やっていたのか分からなくなり。そしてどちらも力尽き。結局二人で寝る事に決めたらしい。

「なら筋トレの後なんですから、よく眠れたんじゃないんです？」
「フィオナに捧げる為の貞操が、こいつに奪われるんじゃないかと思っとな。眠れなかった」

「こいつ アグルが……殺気雜じりにこちらの背中に熱い視線を送ってくるから、いつ犯されるかと思いい眠れなかった」

どちらも牽制するように殺気を飛ばした為、結果的に警戒して二人とも眠れなかったと、ふたを開けてみれば、何とも馬鹿馬鹿しい理由だった。

そのあと再び睨みあうように視線を交わす二人をエミールと私が止め。

二人も黙って出てきた珈琲に口を付けていた。

第三話『伝説の英雄』？（後書き）

フィオナさんのタイトスカートを想像するだけでごはん三杯はいただける気がする！！

第三話『伝説の英雄』？

『伝説の英雄』？

そして、アナトリアにある大型輸送機に機体を乗せ、クルプスさんへのあいさつも済まし。

うるさい喚くアグルを仕方なく私の隣に座らせ。ようやく静かになる。

そこへ「エミール教授。離陸準備整いました」と機長が出発の準備が整ったことをこちらに伝えに来た。

エミールもすぐに答え、機長も足早に操縦席へと戻って行った。

バリスへ来たときのジェット機と違い、この大型輸送機では帰るのに半日どころか一日かかる。

一日中この狭い機内に居なければいけない事を考えると少しだけ気が滅入るが、私だけ文句を言う訳にもいかず、黙って外の景色を眺める。

代わり映えのしない砂色の景色をただひたすらに眺める。

特段、面白い訳ではないが、アグルの方を向いていたら、そっちの方が疲れそうなので、今はこのままでよかった。

正面に座っているデュバルさんの方を盗み見るように視線を動かす。

彼は腕組みをしながら頭に雑誌を乗せ、惰眠を貪っていた。

よほど昨日眠れなかったのだろう。

ならきつとアグルの寝ているのでは？　と思い彼に視線を向ける。

寝ているかもと向けた視線の先に映ったのは、アグルが真剣に資料に目を通す姿だった。

あの資料は先日私が読んだ“GA08　テンペスターTEMPESTAS”に関する書類だった。

真剣な眼差しでページを捲るアグル。すでに半分以上、読み終わっていた。

私でもあれを細かく読むとなれば一日掛かってしまう。

不要な情報つと言う訳ではないが、あの資料にはテンペスターの“全て”が掛かっている。

文字通り、すべて。内部機構から、装甲の各金属の配合率。あの資料さえあればたとえ現物、テンペスターが存在していないとしても製造可能。後半はスペック表と言うより設計図と言う方が正しいほど。

元レイヴンである彼なら、ノーマルの機構なんて見慣れたもの。ならあのスピードで読むことができるのも頷ける。

現に、アグルの目の前に居るエミールもアグルの方へと視線を向けているが、特に驚いたような顔はしていない。

「ん？　どうしたフィオナ。俺の顔に何かついてるか？　付いてるなら、その可愛らしい唇で取ってくれるとありがたい。いやむしろ何も付いていなくて」
「……………」

私が出せる精一杯の力で、アグルの頬を殴るが。アグルはその拳を受けながらもからかう様に笑っているだけだった。

「ひ弱なフィオナたんでちゅね」

馬鹿にするように喋るアグルに、私は持っていたペンでアグルの手の甲を刺した。

「うっぎゃああああああああああ」

騒ぐアグルに視線を外し、もう一度機外へと視線を戻した。

とその時。

「！？」

機体が急旋回をするように傾く。

咄嗟にアグルの腕にしがみ付き、揺れが収まるのをじっと待った。しかし、揺れは収まるどころか、激しさを増すばかりで、一向に静まる様子はなく、エミールもデュバルさんも驚いたように辺りを見渡すばかり。

『機長より連絡。現在、所属不明の部隊から攻撃を受けています
ッ！？ 第二エンジン出火！！』

機長の声を遮るように機体が強い衝撃が走り、大きく唸る。

エミールはこれが攻撃だと分かり、慌てて席を立つ。傾く機内によりめくが、後ろに居たデュバルがそれを支える。

「準備していた甲斐があったな。アグル君、デュバル君、至急後部ハンガーまで行くぞ。フィオナは操縦席に行ってくれ、私もすぐに行く」

唸る機体に声がかき消されぬようにと、エミールは普段出さないほどの大声で私たちにそう告げた。

「フィオナ、行ってくる」

先ほどまでふざけた居たとは思えないほど真剣な顔を付きでアグルがフィオナの手に自分の手を重ねる。

その手で、しがみ付いているフィオナの手を丁寧な手つきで、優しくほどく。

勇ましく去っていく彼に、私はただ視線を送る事しかできなかった。

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

「アグル君はG A 0 8に乗れ。デュバル君は0 3に搭乗してくれ」

「おいおい、俺がノーマルに乗るのは構わんが、この高さからの着地は流石に無理だぜえ？」

「アグル 見てみる。すでに背部に降下用のパラシュートが装備されている」

アグルが驚くように機体へ視線を向ける。

確かに機体には降下用の装備が付けられていた。

だが、なぜそんな事を？

「0 3だけではなく0 8まで譲ってくれる時から怪しいと思っていたが……どうやらG Aは私を消そうとしたらしい。

私無しのアナトリアは容易に破産するだろう。

そこへG Aが介入し、アナトリアの傭兵を、アグル君を手に入れようとしたようだ」

つまりエミールはそれを読み、事前に降下が可能ないように換装を施していたのか……流石はアナトリアの指導者と言う訳か。

「じゃあ下にいる連中はG Aの奴らなのか？」

「いや、あれはマグリブ解放戦線の連中だろう。大方、こちらの飛行ルートを彼らにリークしたのだろう。」

GAにとってもここで私たちが潰しあってくればありがたいと言っ訳だ

再びの衝撃の後、『第三エンジン停止。高度保てません』と機長が告げる。早く機体を下ろさなければ、離脱すらかなわない。それにエンジンを二基失ったままノーマルを二機を乗せて居てはもとよりアナトリアに帰ることもできない。

どちらにしてもこの機体はここで下すしかない。

「ジェス。お前はそのデカ物だろ？ 後方援護に専念しろ」

「後方援護つてお前……確かにお前は元レイヴンかもしれないが、今のお前はリンクスだろ!?」

「伊達に解体戦争を生き残ったわけじゃない。心配するな」

更に衝撃が走り、これ言い争いをしている時間がない事を告げる。デューバルは仕方なく、機体の方へ走って行った。

1	1	1
2	2	2
3	3	3
4	4	4
5	5	5
6	6	6
7	7	7
8	8	8
9	9	9
10	10	10
11	11	11
12	12	12
13	13	13
14	14	14
15	15	15
16	16	16
17	17	17
18	18	18
19	19	19
20	20	20
21	21	21
22	22	22
23	23	23
24	24	24
25	25	25
26	26	26
27	27	27
28	28	28
29	29	29
30	30	30
31	31	31
32	32	32
33	33	33
34	34	34
35	35	35
36	36	36
37	37	37
38	38	38
39	39	39
40	40	40
41	41	41
42	42	42
43	43	43
44	44	44
45	45	45
46	46	46
47	47	47
48	48	48
49	49	49
50	50	50
51	51	51
52	52	52
53	53	53
54	54	54
55	55	55
56	56	56
57	57	57
58	58	58
59	59	59
60	60	60
61	61	61
62	62	62
63	63	63
64	64	64
65	65	65
66	66	66
67	67	67
68	68	68
69	69	69
70	70	70
71	71	71
72	72	72
73	73	73
74	74	74
75	75	75
76	76	76
77	77	77
78	78	78
79	79	79
80	80	80
81	81	81
82	82	82
83	83	83
84	84	84
85	85	85
86	86	86
87	87	87
88	88	88
89	89	89
90	90	90
91	91	91
92	92	92
93	93	93
94	94	94
95	95	95
96	96	96
97	97	97
98	98	98
99	99	99
100	100	100

- - - - -

久しぶりの感覚だ……。
体が覚えている。この感じ……。
どんな機体でも動かすことができる。そんな自信が心の底から湧いてくる。

生きて帰る。どんな機体、どんな敵であろうとも
視界が開ける。

輸送機が目がめまぐるしく旋回し、視界が回る。

下にはMTや戦車。ミサイル車両などが展開している。

問題ない、あの程度の数、今まで幾度となく戦闘してきた。

そう思い、フットペダルに力を込め、機体を砂色の世界に飛び込ませる。

砂色の世界がアグルの視界一杯に広がる。

それは迫るように距離を詰め。降下用の装備が無ければノーマルとて着地はできない。

高度計が狂ったように数字を減らす。

計器が地表までの距離がない事を示す。

すでにパラシュートを開かなければいけない距離を大幅に超えている。

しかし、問題ない。ここで開けば降下速度の遅いノーマルは的になる。

だから開かない。もとよりこの機体は軽量機。重量が軽い分、少しだけ余裕がある。

ネクストであればこんな降下、自身が持つ出力だけで着陸が可能だろうが、ノーマルではそうはいかない。

そんな事を考える事すら久しく感じられる。

「アゲル、流石に限界よ。そろそろパラシュートを使って」

フィオナの声がスピーカー越しに聴こえ、アゲルはようやくパラシュートを開く。

急速な減速の後、それを切り離す。

ブースターの上昇力を生かし、更に勢いを殺し着陸する。

無事に着陸を喜んでいる時間は無い、すぐに攻勢に移る。

まずは前方に展開するミサイル車両。

手にはライフルとブレード。背部には短距離用のレーダーと中型のミサイル。

オーバードブースト

OBで距離を詰めながらミサイルをマルチロックで作動させる。

積み重ねているミサイルの限界性能であるロック六でそれを発射する。

全て撃破……いや一輦残っている。

ブレードで残りを殲滅する。

戦車とMTが距離を詰めていたが、包囲される前にそれを抜ける。

MT二機をOBですれ違いざまにブレードで撃破する。

「固まっているからそうなるんだッ！」

今撃破されて行った彼らどころか、敵にすら届いていない声を上げ、忠告する。

「アゲル。現在敵の攻撃はそちらに向いているわ。

今現在、私たちは上空で待機しているけど、さっきの攻撃で燃料もだいたい漏れちゃったみたい。

だからこれ以上ここに止まれないわ。だけど、すでに回収のヘリは向かわせているから、それで帰ってきて」

「分かった、先に帰っていてくれ。フィオナ達が離脱後、俺たちも自力で離脱する」

フィオナそのあと「帰って来てね」とだけ告げ、通信を終えた。

「フィオナ嬢も可愛らしい事言うねえ。おっし、今着地した。アグルお前の後ろだ」

短距離用レーダーの索敵ではギリギリと言った距離にジェスは着陸した。

ジェスはいさつ代わりに背中に搭載されている二つの中型ミサイルを、前方の戦車部隊に放つ。

八発のミサイルはすべて敵に当たり、生き残っていた二輦も、合流するべく移動してきたアグルの餌食となった。

「流石はレイヴンと行った所か、俺が降下している間にミサイル車両六輦とMT二機か、更に今ので2機か」

「お前だって降下直後に六輦撃破じゃないか？ 撃ち漏らした二機は俺がもらったが」

互いに健闘を称え合う二人。だがすぐに他の敵がレーダーに映る。

「タンク型のノーマル一機確認した。敵は長距離用のスナイパーキヤノンを積んでいる」

「優先的に落とすぞ、ジェス！ 援護頼んだぞ！！」

二人ともOBを使い一気に距離を詰める。

相手の砲撃がこちらに飛来する。

もし直撃を受ければアグルの機体は一撃と持たない。

それほどまでに、この機体はスピード特化のノーマルに仕上がっている。

機動力を好むアグルにとっては、その紙のような薄い装甲によって実現可能な機動力こそ、絶対の信頼が置けた。

敵の懐に入ろうとするが、敵はそれを嫌うかのように両手に持っているマシンガン^{FCS}を連射する。

だが、長距離ロック用の射撃管制装置では接近戦での戦闘には向かない。

敵はアグルを捉えようと奮闘するが、捉えたと思ったら、視界から消えていた。

そこへ無数のミサイルが飛来する。それを慌てて避ける。

しかし、それがいけなかった。次の瞬間、目前に迫っていたのは、ミサイルではなく蒼い閃光。

それがブレードが放つ光だと分かった時には、既にその閃光は画面一杯に広がっていた。

周辺には敵の反応は無し。

今の戦闘でやっと落ち着ける余裕が出たのか、二人は会話を交わす。

「ジェス。そちらの残弾数は？」

「両肩全門発射が一回だけ可能だ。バズーカの弾は残り5発」

「こっちはライフルの弾が8発とミサイルが1発。もう一度ノーマルが現れたら接近戦^{フレード}が主になるかもな」

その時。レーダーが敵を捕捉したことを告げるピピと軽い電子音が鳴る。

アゲルとジェスが捕捉したのは“ほぼ同時” 長距離索敵が可能なジェスのソーラーウィンドと短距離用のレーダーしか積んでいないアゲルのテンペスターが同時にレーダーに反応する。

それはノーマルとは桁外れでの速度で 接近できる“機体” の出現を意味した。

「「ネクスト!!??」」

第三話『伝説の英雄』？（後書き）

ノーマル二機 VS ネクスト！！ 燃えるような展開だ！！ ゲ
ームでも折角4の主人公は元レイヴンなんだからノーマルで出撃で
きるミッションがあってもいいと思う！！

第三話『伝説の英雄』？

『伝説の英雄』？

「「ネクスト！！？？」」

二人は同時に同じ結論に至る。

だが、敵が判明したところで対抗策は皆無。

考えうる最悪の敵　ネクスト。

それが今、ノーマルに搭乗している二人の前に現れたのだ。混乱こそしても、作戦を冷静に考える事などできなかった。

「ッ　アゲル。お前だけでも逃げろ」

「そんな事できるか！！」

オーバーブースト

「俺の機体はOBなんて高級品は積んじやいない。

逃げ切れるとしたらお前の機体だけだ。なら俺は時間稼ぎをやるのが今考えうる最高の作戦だと俺は思うが？」

ジェスの言う通り。ネクスト相手にノーマル二機で到底対抗できるはずがない。

片方逃げ切れる可能性があるだけでも幸運。そう考えるのが普通。しかし、理屈としても理解できても、それを実行に移せなかった。

「早くしろ！！」

ジェスの怒声にアグルの取った行動は

「ネクストにノーマル二機で挑んでみるってのも楽しそうだろ？」

「お前ツ強がりを！！」

「来るぞジェス！！」

「死んでも知らんぞ！！」

『^敵 テキ、^{発見} ハツケン』

正面から向かってくる敵を観察する。

脚部はタンク。右手にバズーカー、左手にロケットを装備。

右肩には大型グレネード。左肩はミサイルだが、肩に連動式のミサイルが装備されている。

一番注意するとすればミサイル。数発程度なら持つが、十数発となれば話は別だ。

それ以外には当たる確率は低いながらも右肩の大型グレネードには注意をしなければいけない。

これに関しては一発でも当たれば即死亡。爆風による視界悪化も危険だ。

敵は、頑丈な装甲で身を固め。更にはネクストの最大の特徴であるコジマ技術が可能とする最強の盾であるPA。^{プライマルアーマー}

この二つが敵には備わっている。“ソレ”を相手にこちらはノーマル二機。

分が悪い賭けだが、やらない訳にはいかなかった。

敵が視界に入るも、まだどちらも有効射程ではない。いや、正確にはミサイルなら命中させることも可能だが、こちらも相手のネクストもそれを行わなかった。

それはどちらにとっても長距離からのミサイル攻撃が有効打にならない事だと考えていたからだ。

今の時代、ミサイルによる単独攻撃では命中率はそれほど高いものではない。

他の種類の攻撃と同時に進む事によって、初めて高い命中率を可能とさせる。

ミサイル以外の攻撃が可能になった時。というより、その他の攻撃が“当てられる確率が高い時”に初めて戦闘が行われる。

故に敵が見えている今この瞬間にも、まだ考える猶予が与えられていた。

ならその時間を最大限に利用し、考えうる最高の作戦をアゲルは考え始める。

長距離からのPAを削り、徐々にダメージを稼ぐ。

駄目だ、それを行うにはこちらがあちらの機動力を大きく上回る必要がある。

それに、それを行えるほどの弾丸は既がない。

では増援が駆けつけるまでの間、時間稼ぎを行うというのはどうだ？

これも駄目だ。先ほど上げた案のように、敵は多少の被弾なら気にすることなくこちらに猛勢を掛ける。

時間が経ては経つほど、相手の攻撃は一層の激しさを増すだろう。更に言うとすれば、増援が駆けつけとしても、ネクストに対抗するにはネクストしかない。

ネクストがない事にはどちらにしてもこちらに勝ち目はない。

フィオナ達が俺のネクストを持つてくると想定しても、あまりに

も時間が掛かる。

その間、敵が酒を片手に映画鑑賞を行い、更にそのまま眠ってしまい朝になってしまふ。という事態が発生すれば可能だろうが。それだけの時間が稼げるのなら、もとより自力でここから離脱している。

なら攻撃を行うのなら敵の攻勢が弱い初撃。その時に敵に致命的なダメージを与えるしかない。

それでは接近戦でブレードによる直接攻撃？

一見、一番現実的な案に見えるがこれも駄目だ。

敵は既に被弾を視野に入れ戦闘に臨んでいる。そんな相手にブレードを決めようとすれば、一撃を決める事が可能でもこちらもその一撃と引き換えに、“命”という対価を払う必要がある。

「ジェス！！ 俺が合図をしたらネクストに向かってミサイルを全弾発射しろ」

「何か案があるんだな！？」

アグルはジェスに詰め寄りバスーカーを奪い「ああ」と短く返事をした。

アグルは敵と同じようにオーバーブーストOBで距離を詰める。

その途中、バスーカーと最後のミサイルを敵へと発射するが、どれも高速で走る相手には当てる事は出来なかった。

内、ミサイルの弾丸が敵へと直撃する。しかしその火力のほとんどはPAによって吸収された。

敵ネクストは多少の被弾も止む無しと言わんばかりに、速度を緩める事無く突撃をする。

「今だ！ 撃て！！」

声を張るように合図を送る。

ジェスは返事をするのではなく、トリガーを引くことで答えた。

雲を引く無数のミサイル群が空を覆う。

一度高度を上げたミサイルは、瞬時に角度を変え、まるで稲妻のように敵ネクストへと突き刺さる。

爆炎が一瞬辺りを包むが、敵ネクストはその黒煙の中から突如姿を現す。

全弾直撃しながらもP Aが剥がれただけで、敵は健在。

そんな相手にアグルは尚もO Bを使用しながら敵へと詰め寄り、止めとばかりにバズーカーを構える。

「ッ！？」

度重なるO Bの使用により敵は既にコジマ粒子もエネルギーも尽きているのか微動だにしない。

しかしながら、アグルの一撃を貰った後、反撃で重グレネードを撃つつもりなのか、右肩の武装を構えた。

そんな相手にアグルはバズーカーを発砲する訳ではなく、ただ投げつけた。

突然、目の前に飛来したバズーカーを見て、敵は一瞬だが狼狽えた。

まるで全身から血を噴出しているかのようにエネルギーが流れ出る。

一瞬でエネルギーがレットゾーンへと入るが、既にこちらの間合いいい。

ぶつかるとような勢いで相手の懐にブレードを滑り込ませる。

最大出力のブレードが相手の機体を穿つ。

それと同時に左腕が爆散する。

衝撃で機体が吹き飛ぶが、先ほどとは違い、無様に地面へと転がる。

すでに動かない機体。

アグル自身も先ほどの爆発で内部の部品が脇腹へと刺さっていた。激痛に顔を歪めながらも、血だらけの手で機体の再起動を行うが、動かしたのは通信機と一部のカメラだけ。

しかし、そのカメラが捉えたのは。

「嘘だろ……」

プスプスと音を出しながらも再び機動を始めたネクストの姿が映っていた。

コジマ粒子が漏れているのか、緑の粒子が辺りに広がっている。かなりのダメージを受けているが、動けないノーマルと武装のないノーマルを撃破するには不足はない。

『ム、ムダ……』

万策尽きた。そう思いアグルはそつと目を閉じた。その時突如、敵ネクストが空を見上げた。

「こちらホワイト・グリント。リンクス、ジョシユア」オブライエ
ンだ。救援に来た、よく持ちこたえたな」

どこか壊れているのか、雑音交じりではあるが通信機は確かにそ
の声をアグルへと届けた。

「……………」

敵ネクストはジョシユアが作戦領域に入ると、脇目も振らずもと
来た道を走って行った。

ジョシユアもそれを追いかける事も出来たが、今はアグル達が優
先だと判断したのか、追いかけるような事はしなかった。

「ノーマル二機で、ネクストに対抗するとは……私は少々君を侮っ
ていたようだ」

そんなジョシユアの素直な賛辞にも答える事も出来ず、アグルは
出血で気を失った。

第三話『伝説の英雄』？（後書き）

元レイヴンは伊達じゃない！！　と思わせる戦いぶり。ですが、そんな彼にもネクスト相手じゃ分が悪い。

ちなみに本編には書かれていませんが相手は『スス』事『アシュートミニア』です。

フィオナが「正対は避けて」って言う相手です。正面から挑むのは大変危険な子です。

第四話『覚醒』？

『覚醒』？

策も尽き、機体も碌に動かない。

そんな中、敵ネクストがゆっくりとこちらに距離を詰める。

まるで何も抵抗出来ないこちらを嘲る様に、ゆっくりと。

脇腹に刺さった破片が意識を朦朧とさせ、気絶しそうになるが、鋭い痛みが意識を失わせる事はさせなかった。

そのおかげで、自分がいまだに生きている事を感じ取れるが、万策尽きた今。たとえ命が有ろうとも、一分後にはこの機体ノーマルが自分の棺桶代わりだろう。

あらゆる回路がショートし、使い物にならない中。

唯一使える“通信機”は今の状況では如何ほどの役に立つのかは分からないが、スピーカーからは“男”がしつこく『逃げる！』と何度も繰り返していた。

そんな言葉を聞き、視線すら送る事なく手探りで右脇にある脱出用のレバーを引いたが、反応は無かった。

五回も引いて反応が無いのだ。たとえあと何回引く張ろうが結果は変わらないだろう。

ハッチの装甲は歪み。機能は停止しているにも関わらず、先ほどの“特攻”の為か、内部温度は上がるばかり。

すでに内部温度はサウナを超え。ネクスト奴が止めを刺しに来なくとも、このままのペースで行けば、五分後には確実にあの世行きだ。

蒸焼きよりは、グレネードであつという間に殺してくれた方がきつと楽に死ねるだろう。

虚ろな目で敵を見る。

確実に有効打をたたき込める距離に入り、敵が右肩のグレネードを構える。

ここまででは予想通り。

これ以上痛みに苦しまなくて良い事に喜びを覚えながら、静かに
瞼を閉じた。

『シ、シネ……』

その言葉を最後に、意識がゆっくりと闇へと飲み込まれて行く。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	8												

「ハッ！？」

飛び起きるように体を起こす。

そして脇に鋭い痛みを感じ無意識に手で押さえた。

そこでようやく自分がベッドの上にいる事に気がつく。

壁から生えた透明な管は、自分の手首へとつながっていて、それが点滴である事を表していた。

部屋を見渡し、ここがどこかなのかを考える。

白色が支配するこの部屋には窓はない。

ベッド脇に置かれた小さなテーブルには花瓶が置かれ。

花瓶に添えられている花の種類は分からないが、その黄色い花が申し訳程度に色を加えている。

病院にしては静かすぎると言っているほどの無音。

ここまで無音の中に置かれては、まるで自分だけが世界から切り離され。置き去りにされてしまったような気にすらなる。

先ほど見た“夢”のように、痛みだけが自分が生きている事を証明してくれた。

普通は疎ましいはずの、痛みが今の自分には大切なモノだった。

確かに自分は生きている。それは分かる。しかしココはどこだ？一番の疑問はそこだ。

まずこれを知る事が先決だと思い、ベッドから体をずらし床へと足を付けた。

リノリウムの床が足を冷やす。

体重を足に掛け、ゆっくりと立ち上がる。

脇に走る痛みを除けば、自分の思い通りに体は動いてくれた。

これで更に情報が加わる。

筋肉の衰えが全く無い事から、どうやらこのベッドに横たわっていた時間はあまり長くなかったようだ。

立ち上がりはしたが、自分の手に絡みつく点滴が行動範囲を奪う。

仕方なく、点滴のチューブが許す範囲で動くことにした。

何をおいてもまずはドアの方に歩み寄った。

部屋の一角に、四角い長方形の枠を見つければそれをドアと考えるのは、そう難しい事ではない。

しかし、そのドアにはドアノブらしき物体が付いていない。それがイコール、中からドアを開けられない事に気がつく。

この事実で、この部屋が何かの実験棟か精神病棟などの一室である可能性が一気に高くなった。

今だ少ない情報を脳内で整理する。

考える時間が十分にあるかは分からないが、今は“考える”。それしか行えぬのなら、それを行おうとも。

[illegible]

基地内部の食堂で病院服で大量の料理を貪るように食べているアグルは一際異様な雰囲気を放っていた。

そんな彼を見つけ、私は珈琲片手に隣の席に腰を下ろした。

「アグル？ 怪我はもう大丈夫なの？」

視線だけ私に送り、アグルは何度も頷いた後、近くに置いてあった水を手に取り、それを一気に飲み下す。

そして空っぽになったコップを勢いよくテーブルに戻し「ああ、運動はまだ駄目だが、食事は何を摂っても良いとよ」と返し、再び食べる事を開始した。

「食事制限が無いからって、いきなりそんな量を食べても良いとは
お医者様も思っていないはずよ？」

「ほうか？」

口いっぱいにご飯を頼張るアグルを見つめながら、先週の事を私はふと考えた。

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

アゲルとデュバルさんのノーマルを下ろし、基地に応援要請を出したが敵のジャミングからか、長距離通信は使えなかった。

助けにアゲル達を助けに行きたかったが、非武装の輸送機では何
もできない。

今は一秒でも早く増援を送ってあげる事しかできなかった。

エミールは焦る私に、まるで子供をあやすように「心配ない」と
繰り返し替えずばかり。

心配ないと言うエミール。しかし、私には嫌な予感がしてならな
かった。

その予感がすぐに予感ではなく、現実となる。

「エミール教授！ 基地からとの通信が回復しました！！

それと、情報の真意は不明ですが、先ほど交差した輸送機からの
通信で、バリス砂漠周辺に高濃度のコジマ粒子を確認したとの事
です。その輸送機の情報を信じるとすれば、そのコジマ粒子の発生原
因はネクストと予想されます」

機長が知らせる“最悪”の情報が現実であれば、それは“最悪”
の事態を招くことになる。

驚くように目を丸くする私。しかしエミールは少しの動揺も感じ
させる事無く、淡々と喋る。

「その輸送機はこの所属だ？」

「アスピナです」

「ネクストが搭載可能な大きさか？」

「重量級では出力が足りませんが、中量級まででしたら可能です」

言葉を交わすエミールの顔を私は見つめ、何を考えているのかを
探る。

そんなエミールは静かに「借りを作ってしまったか……」と呟き、
私に説明をした。

- - -
- - -
- - -
- - -
- - -

『アナトリアの傭兵は生きていますかね？』

「私が到着するまで生きていれば良し。生きて無かったらそれだけ
だ」

コックピットの中で機体の最終調整を行いながら答える。

防護服姿の整備兵が忙しく動き周り、機体に不備がないか外から
調べる。

チェックを行いながら、アナトリア^彼の傭兵の事を思う。

ネクスト相手にノーマルが対抗できるかどうかはわからないが、
もし私が来るまで耐える事が出来ているのなら助ける。

自分が行える最初で最後の手助け。

これから先。私の一存では機体は動かせなくなる。
その時、彼の味方になるか、それとも敵になるかは私には分からない。

だが、今は。今だけは彼らの為に動こう。
それが私にできる“償い”なのだから。

輸送機からネクストが飛び立つ。

白色に塗装された機体は太陽に反射し白銀のように光る。

眼下に広がるは一面土色。

オーバーブースト
OBが唸りを上げ、周りの景色が霞み、世界が一気に加速する。
音速すら超え。あつと言う間にレーザーレンジには三機の機影が
映る。

すでに二機のノーマルの内、一機は大破しているが、手足を頻りに動かしているところを見ると、中のパイロットは生きてはいるのだと判断できた。

もう一機の重量型のノーマルは必死に敵へと走るが、鈍足な上にOB無しの機体ではあまりにも足が歩みが遅い。

ネクストの武器がノーマルを捉える。

間に合わない　そう思い、敵にこちらの存在を主張するため肩に付けられたレーザーキャノンを発射する。

照準は甘い、これで敵がこちらの存在に気がつくだろう。

案の定敵が歩みを止め、こちらを向く。

通信を開き、相手に言葉を放つが、返って来たのは片言の言葉。
そしてその言葉に答えるようにすぐさま機体を反転させ、自分とは逆方向へと走り去っていった。

追撃も可能だが、今はいち早くノーマルのパイロット^彼の救出が大切だった。

大破したノーマルの前に降り立ち。

先ほどの同じように通信をする。

ノイズがひどいが確かにアグルの息づく声が聞こえた。

酷く消耗しているのか、それともどこか怪我をしているのか、息はかなり上がっていた。

無理矢理ハッチをこじ開け、中を覗く。

予想通り軽量ノーマルのパイロットはアグルであった。

しかしその顔は蒼白で、先から返事が無いのは、“しない”ではなく、“できない”と言った所だった。

左の脇腹から大量に流れ出ている血は、アグルの出血量が危険な域に入っている事を意味していた。

すぐにでも処置をしなければ、確実に命を失う事になるだろう。

機体から医療パック取り出し、ノーマルのコックピットへと走る。

アグルに刺さっている破片自体は既に体から零れ落ちていた。

そしてそこから今も血が流れ続けていた。

医療技術などの心得は無いが、経験と勘で処置を施していく。

必死に止血を行い。応急処置を終え、ふと顔を上げると傍らにはスキンヘッドの黒人が心配そうにアグルへと視線を向けていた。

彼に後の事を任せ、次に耳に付けたインカムで輸送機との連絡を取る。

「アナトリアの傭兵と他一名を確認。アナトリアの傭兵は左脇腹を負傷。」

出血がひどく大量の輸血が必要だ。急ぎ準備をしてくれ」

『了解。回収班があと三分ほどでそちらに着く。輸血パックも既に準備してある。機体は他の者に任せ、先に帰還されたし』

「了解した」

通信を終え、再びアグルの顔を見る。

やれることはやった。あとは彼の生命力に賭ける他なかった。

- - -
- - -
- - -
- - -

「貴方が点滴のチューブだらけで担ぎ込まれたときは、心配したけど。3日でここまで元気になるなんてね……」

「失った血を取り戻すなら食べるのが一番だろ？」

「だからって朝からステーキを一キロも食べる人はいないはずよ……」

……」

口のまわりをソースで汚しながら食べる彼を見つめ。

彼の生命力の強さに驚きながらも、無事ではなかったが、ちゃんと生きて帰ってきてくれた事にうれしさを覚え。

微笑みながら紙ナプキンで彼の口元をそっと拭いた。

第四話『覚醒』？

『覚醒』？

「今さらどういづつもりだ？」

『許してくれなんて言うつもりはない。ただ、自分が自分を許した
いが為に行っただけだ』

「後悔しているのか？」

『昔も今も、あの時の行動が間違ってるなんて思った事は無い。だ
がしかし、他にも道があったのかもしれない、と思う時もある』

「ふん、まあいい。今回の事は素直に感謝している。彼 アグル
君を失わなくて済んだのだ」

『ええ、私一個人としてもアグル君には大変興味がありますからね。
彼はとても貴重な存在です。』

それよりも……。今回の襲撃。やはりG Aが絡んでいます」

「ああ、その事はもちろん分かっている。それ以外にも君がアナト
リアにA Cを持って駐屯しているとG A社に偽情報を流し。

G Aの部隊に圧力を掛けていたこともな」

『全て御見通しですね。はいその通りです。G A社はやはり貴方を始末した後、アナトリアの傭兵を無条件で手に入れられるように策を弄していたようです』

「G A社にも困ったものだ。それに今度のミッションは……おっと、君と話していると要らぬ事も喋ってしまいそうだ。すまないがもう切らせてもらおうよ」

『分かりました。ではまた機外がありましたら』

「そのような機会が来ない事を私は願っているよ」

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

最後の機体チェックを行いながら5度目になる作戦説明を聞く。

「作戦を確認します。マグリブ解放戦線の陸送部隊を襲撃し、同組織のイレギュラーネクスト、砂漠の狼こと、アマジグの機体を破壊します」

「アマジグは、致命的な精神負荷を受け容れることで、低いA M S 適正を補い、

機体の戦闘力を、限界以上に高めています」

「彼は、ホワイトアフリカ各地の反体制組織から、『英雄』と称えられるほどの相手ですまともに戦うには、リスクが大きすぎます」

「彼のネクスト、バルバロイはイクバール標準機ベースの、軽量機

体なので機体本体の防御力は、決して高くありません。起動前に、一気に叩いてください」

「以上、作戦の確認を終了します
無事の帰還を……………」

最後の言葉を聞き、それを合図にハッチが開く。

あとは地上で相手の到着を待つだけだ。

早ければ交戦から20秒足らずで片付く簡単なミッション。
順調に進めばの話ではあるが……。

「一瞬でケリを付けるにはやや火力不足か？」

バルバロイが到着するまで、暇だったので今さらながら兵装について考えていた。

中距離用のライフル銃とブレードはいつもの装備しているが、それに付け加えて今回は肩に大型のグレネードを一つ積んでいる。重量はギリギリ“オーバー”しているが、動けないほどではない。相手が固定ターゲットのような物だと考えたら、この装備も捨てたものじゃないはず。

今回の場合、大口径の武装を2つ積む方が理想かもしれないが、対ネクスト戦闘ではどうしてもいつものような軽量のアセンブルをしてしまう。

結果的に手に持っている武装は不動と言っていいほど毎回同じではあった。

対ネクスト戦闘でない場合はその限りではないが、やはりこの兵装が安心する。

しかし、命は一つしかない。当然如くやり直しが利かないのが人生。

色々なアセンが可能であつても極力、命を預けるとすれば、自分が信頼できるアセンに限る。

「作戦エリア内ッ………バルバロイ、既に起動しています!!
そんな……気づかれていた!? 何故……お願い、生き残つて!!」

フィオナの言葉と同時に、自然と背中に背負っていたグレネードをパージする。

弾薬費などが勿体無いなんて考える余裕すらない。敵は軽量機。同じ軽量機同士なら、なおさら重量オーバーで戦闘が行えるはずが無い。

先手を取るために高度を上げ、敵の位置を探る。

『悪いが、まだ死ねんのだ。貴様らの所為でな!!』

閃光のように光る機影。
目に映るは敵ネクスト。

地面を滑るように走っていたが、アグルの機体を確認するとまるで弾丸のように真っ直ぐに上空へと駆け上る。

こちらの方が早く上昇を始めたにも関わらず、既に高度による優位性は相手にあった。

あつという間に頭上に来ると、豪雨のような小型の散布ミサイルが降り注ぐ。

クイックブリスト

QBでこれを避けるも、次の瞬間には敵のショットガンが背中からアグルの機体を容赦なく攻める。

ブライマルアーマー

一瞬でPAの4割が削られ。ダメージの軽減率が下がる。

ダメージ自体は10パーセント未満ではあるが、先手を取るはずが、逆にこちらが先制攻撃を受けてしまった。

今の一瞬の交差で分かったことは、相手の技量はアグルとは段違いだと言う事。

戦闘経験は多いつもりでいたが、どうやらそれはあちらも同じで戦いのノウハウは互角。

であれば、より適正が高いか、それともネクストの戦闘経験が豊富かで勝敗が決まる。

適正は互角。ネクストでの戦闘経験 劣勢。

本来であれば、この差を奇襲によって埋めるはずであった。しかしそれを失った今、勝率は格段に低い。

だが一つだけ優っているものがある。

（相手の武装はショットガンと突撃ライフル。それに散布ミサイルか。どれも接近しなければ意味のないものだ……）

敵の射程がこちらより短いのであれば、これを最大限に利用するしかない。

今はこれに賭けるしかなかった。

機体を反転させ、すぐさま距離を取ろうとするが、それは敵も予想済みなのか周り込むような動きでこちらの前方に立つ。

あまりの敵の速さに驚きながらも横へと飛ぶ。

しかし銃口の向きを変えるわけではなくバルバロイはアグルに合わせ同じ方向へ飛んだ。

再び目前に現れる敵ネクスト。

もう一度飛ばうとしたが、その前に敵のショットガンが腹部を挟む。

その攻撃でPAが剥がれ、機体が硬直する中、敵はすかさず反対側に持っている突撃銃の引き金を引く。

PA無しの機体に容赦なく食い込む弾丸。

今の一瞬で前面の装甲はほとんど持っていかれ。もう一度同じ攻撃を受ければ2度と動けまい。

『消えろ、消えろ、消えろ』

もがくように機体を捻らせ、次弾を回避するも、劣勢はいまだ変わらず、敵の射程にも入ったままだ。

「くそおおおー!!」

無我夢中で機体を走らせる。

今までに感じた事のない衝撃が脳を駆け巡る。

何かの回路が繋がり、そこへ情報が流れる。

頭の中でスイッチが入ったように、何か切り替わり機体が走る。

- - -
- - -
- - -
- - -

「!？」

アマジグは目を丸くした。

敵は一瞬で2回のQBを行い。一瞬で自分のレンジから外れたのだから。

それだけでは飽きたらず、一心不乱に相手は“2段ブースト”を連続使用しているのだ。

自分ですら、2段ブーストの連続使用には耐えられない。

にも関わらず、相手はいきなりそれをやってのけた。

力を抑えていたのか？ いやそんなはずはない。一瞬で生き死にが決まるような戦いで力を隠す必要がどこにあるというのだ？

と言う事は、やはり相手は今まさに2段ブーストを会得したと考えるのが普通だ。

AMS適正が高い者でも2段ブーストが可能になるので時間が掛かると聞く。

そしてそれを訓練や演習ではなく実践で覚えるリンクスなんて事例は聞いた事がない。

異常。初めは侮っていたが、本気で行かねば、やられるのは

こちらかも知れぬ。

距離の優位性を失っては勝てぬと考え。アマジীগはアグルと同じように2段ブーストでその姿を追う。

しかし、その背中に追いつくために、アマジীগ自身も2段ブーストの連続使用を行おうとするが、すぐに断念する。

息すら出来ぬほどの激痛が脳に走り。それを可能とさせなかった。自分程度のAMS適正では、連続使用はできないか、と思い。できる限りのスピードで敵を追う。

「足掻くな。運命を受け容れる」

敵とて、こちらと戦闘する気があれば攻撃の瞬間必ず後ろを振り返るはず、その一瞬に全力で攻撃を行えるほどの距離を保てればいい。

そして時は来た。

相手はブースタを切ると同時に反転。

だが敵はあるうことか、こちらとの距離を詰めるように前方にQBを吹かす。

自分自身も前方へと全力で進んでいるだけに距離が一瞬で詰まる。

一度目のチャンス 突撃銃の有効射程に入るが、しかし銃口が敵に向いていない。

二度目のチャンス ショットガンの有効射程。

しかし、これもあまりの敵の速さに驚き、満足に照準へと収まら

ず、敵の脚部を撫でるように弾丸が通過するだけだった。

そして次に来たのは……。

敵のブレード範囲

- - -
- - -
- - -
- - -

『その力で、貴様は何を守る……？』

『終わりか……あるいは、貴様も……』

「バルバロイ、沈黙」

自分ですら何が起きたが分からない。

しかし、相手は先ほどの高機動とは打って変わり、動かぬ鉄の塊と化していた。

「アマジグはずっと、本隊と独立して行動していたようよ……味方を汚染しないように」

「英雄、か。最初から、全てを受け容れていたのかしら……？」

フィオナのその言葉を最後に、眠るように意識が深い闇へと落ちて行った。

- - -
- - -
- - -

- - - - -

「アナトリアの傭兵」が砂漠の虎を撃破したそうじゃないか？」

初老も過ぎ、もう老人と言っているほどの男が問う。

この男性は一見優しそうな老人に見えるが、その優しげな笑みの奥は、誰よりも金に固執し、その金の為になら大勢の人間すら殺すのを厭わない。

「BFFの爺は耳ざといな。俺のところでもその情報は掴んでいるが、真意のほどはどんなんだ」

机に脚を置きながら、偉そうに煙草を銜えている男が喧嘩腰で答える。

彼はインテリオル・ユニオンの社長にして、今でも開発主任として活動している。

しかしながら同じレイレナード陣営にも関わらず。BFFの事はよく思っていない。

「レイレナードの情報網でもそれは確認されています。ほぼ確定情報だと思われますよ」

銀髪にオールバックがトレードマークのような男。レイレナード社の若社長。

更に特徴的な鋭い眼光でモニターを見つめ。そしてそのデータを他の二人にも表示した。

「ほう、これは……」

「すげえな……」

関心するような声を上げる二人に説明するように言葉を紡ぐ。

「砂漠の虎こと、アマジীগはけしてAMS適正が高いとは言えないが、かと言ってアナトリアの傭兵に負けるほど低くはない。むしろアマジীগの方が適正は高いと思われる」

「だが現にアマジীগはレイヴンのやられた」

煙草を突きつけるように男が言い放つ。

それに答えるように銀髪のオールバックの男は話を続けた。

「実戦で、初の二段ブースト……どうやら我々は彼を少々侮っていたようだ。評価を改める必要があるな」

ホワイトアフリカの戦い。

特に、反体制の英雄たるバルバロイの撃破はアナトリアの傭兵の価値を、一気に押し上げた。

だが、我々が単純な成功を享受する一方でパックスには、深刻な対立の火種が生じていた。

コジマ技術の主導権争い。

アクアビットを擁する新興のレイレナードグループと、ローゼンタール傘下オーメル・サイエンスによるこの争いは、次第に他企業に波及し潜在的な対立を顕在化^{けんざい}させていく。

世界の、欺瞞ぎまんに満ちた安定は、失われつつあった。
私はそれを、アナトリアのチャンスだと考えていた。

第四話『覚醒』？（後書き）

これで第一章は終わりです。

次回からは第二章に入り、アゲル視点が多いかもしれません。
今回もご愛読ありがとうございました。

もしよろしければ次週もよろしく願います。

第一話『休息』

『休息』

旧チャイニーズ・上海海域にて現在、アゲルは中量機に突撃ライフル二丁。背中には軽プラズマキャノンを二門積み込み。

どちらも瞬間火力を重視した構成で、作戦目標である所属不明艦艇と海上にて交戦中であつた。

途中に居るヘリコプターガンシップが放つミサイルの雨を掻い潜り、目標へと接敵する。

目標であるBFF社の特務艦は、高威力ロングレンジキャノンと多連装垂直ミサイルを装備している。

今のところはキャノンの直撃は無いが、何度も冷や汗を掻かせるほどの距離を弾丸が通過していく。

避け切れなかつたミサイルで徐々に装甲を削られ。焦りが出始める。

「アーマーポイントAP残り40%。プライマルアーマーPA回復まで10秒。回避を優先して!!」
「クソッ!!」

PAが剥げ。普段より厚いはずの装甲が直接削られる。

運動性能自体には影響が出てないが、だからと言って安心できる物ではなかつた。

更に付け加えると被弾率も予想より倍は多い。

いつもであれば犯さないミスを続けざまに行う。

当てられるはずの攻撃が外れ。避けられるはずの攻撃に喰われ。

引つ切り無しで続く連続ミッションで心身ともに疲弊し、反応が遅れる。

視界がぼやけ、
手足の反応が鈍る。

「目標、すべて撃破。作戦は成功です、お疲れ様でした。帰還してください」

[illegible]

今回のミッションは、予測では被弾率は20%以下。弾数は半分は残るはずであった。

ただ、蓋を開けてみれば結果は被弾率75%。残弾無し。

ひどい、なんてもんじゃない。

こんな低難易度の任務で彼は何度も死にかけた。

今回のアセンを中量級に構成するのではなく、軽量級であれば死

んでいなのかもしれない。

隣で次のミッションに備え資料に視線を落としているエミール。私もエミールも疲れた目をしていたが、彼　アグルはそれ以上にひどかった。

私達の前では普段通りに振る舞っているが、時間さえあれば少しの間でも睡眠を摂っていた。

食事はすら疎かにしながら泥のような眠り。時間の許す限り惰眠を貪る。

私は何度もエミールにアグルに休息を取らせられないか話を持ちかけたが、今は一番大事な時期らしく、受け入れてはもらえなかった。

アグル自身も理解しているのか、きついながらもギリギリの所で持っていると言ってもいい。

しかし、どちらにしても危うい。

確かにアグルを売り込むには大切な時期な事は理解できる。

だけど、彼自身を失ってしまえば何の意味もなさない。

現に、彼は今も死にかけた。

戦い方は次第に大味になり、繊細さを欠いている。

本来アグルにあったはずの高度な操縦技術が生かされていない。

それに以外に問題を上げるとすれば、例えば今回の任務。

ミッション自体は成功しているのだが被弾率が高いせいで、報酬より修理代の方が少し上回っている事などがある。

ミッションを成功させれば評価は上がる。

しかし、度重なる連戦で彼は疲れ。彼自信がより危険な状況に至りやすくなる。

それによつて被弾率と弾薬費が嵩み、報酬よりもマイナスの方が大きくなる可能性が高くなる。

最悪の場合ネクストパイロット。リンクス自体を失う可能性すらある。

考えれば考えれ程問題が出てくる。

やはり何らかの処置を考えなければいけない。

[illegible]

資料を手に取り。集積したデータを見る。

彼は、身に危険が迫ればアマジグと戦った時のように異常な機動を見せてくれると考えていたが、結果は違った。

確かに企業間での彼への評価を上げる、と言う理由もあったが、それ以上に彼自身の“力”を試そうとしたが、結果は芳しくない。

そう簡単に思惑通りとは行かないとは考えていたが。この程度のデータでは未だ掴めない。

低いA.M.S.適正にも関わらず。彼がやってのけた二段ブースト。

二段ブーストが可能な他のリンクスのAMS適正を100とした場合、アグル君のAMS適正は高く見積もっても60程度。とてもあのような芸当をやったのけられるはずが無い。しかしながら、彼はそれができた。限定的な状況下ではあるが、一度は可能としたのだ。二度目が出来ぬ理由がない。

アマジグ戦から、幾度も任務に向かわせ、データを収集したが、二段ブーストを見せたのは一度もない。

前兆のような物はあったが、そのどれもが不発で終わっていた。

更に縛りつければ見えてくるのかもしれないが、先の任務は赤字であった為、これ以上悠長にデータ取りをしている余裕はなくなつた。

これ以上続ければパイロット自体を失うかもしれない。

それだけは絶対に避けねば。

しかし今一度 ネクスト戦の舞台を用意する必要がある。

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

朝、開口一番にエミールはアグルに休息を取らせることを約束してくれた。

研究室のドアが閉じられた音で、ようやく私は我に返り、アゲルの元へと向かう。

丁度今の時間は彼は“日課”に勤しんでいるはず。

そう思い、彼の元へ急いだ。

[illegible]

ノーマル部隊隊長であるジャス・デュバルはいつものように日課であるランニングを行っていた。

ノーマル部隊の訓練内容の中にランニング自体は入っているが、その“訓練”自体が毎日行われている訳ではない。

実際、このノーマル部隊の主な任務は操縦訓練とノーマル自体の整備がほとんどと言っていい。

しかし、自分の命を守る為にジャスや他の隊員もトレーニングは欠かせない行事となっている。

ノーマルの操縦はパイロットが手足を動かして初めて、動く物だが、ネクストは違う。

ネクストは体で操縦するのではなく、頭で直接動かせる。極端な言い方をしてみれば体なんて要らないのだ。

だがしかし、アイツ。アグルは俺と共に“日課”に勤しんでいる。
それだけが疑問だ。

「なあアグル。お前は何で“体”を鍛えている？」

隣で息を乱す事無く走るアグルに視線を流す事無く、声だけを伝える。

「あ？ 質問の意味がよく分からん」

「すまんすまん。話を急ぎ過ぎたな。お前はネクスト乗りにも係らず、なぜ体を鍛えているんだ？」

自分の頭の中ではすでに話が進んでいただけに、少し言い回しが短絡的になっていたようだ。

改めに言いなおすと、アグルは少しだけうなり考えた。

「うーん……。そうだな、一つ言うとなれば“習慣”だな。まあそのまま“日課”だと思ってくれてもいい」

「“習慣”？」

「ああ。俺はレイヴン時代が長い。お前がそうであるように、ノーマル乗りは体が大事だ。より丈夫な体作りこそ自身の生存率を上げるからな」

「その昔培った“習慣”があるために、今でも体を鍛えていると？」

「確かに、俺も未だトレーニングを行う必要性は無いと思う。だ

がしかし、自分の中で 丈夫な体〃高い生存率 〃という図式ができている為に、今さらそれを変えられないんだ。だからやはり“習慣”と言った方がいいかもしれないな”

そんなものか、と声を上げようとしたが、前方に立っている女性の姿を見て。その言葉を飲み込んだ。

「フィオナ!!」

イエルネフェルト教授の娘であるフィオナ・イエルネフェルトの姿を見つけるとアグルは全速力で駆け寄った。

あれではまるで“犬”だな。などと考えながら、自分のペースで話に加わる。

「つまり今日は休みと?」

「ええ、さっきエミールの口から直接そう聞いたわ。今日は全面的に休み」

途中から話に加わったが、どうやら内容は、休息云々の話だったようで、アグルは跳ねるように喜びを全身で表現していた。

連日にわたって任務に明け暮れていたアグルにようやく休息が与えられたか。

今こそ元気に跳ね回っているが、先ほどまでの彼はどうも覇気がなかった。

軍医に見せればしばらく休息が貰えるほどの疲れ切った表情。

しかしながら、彼の代替えが利かない故に今の今まで戦っていたのだ。

突如、足元がふらつき体制を崩したアゲルを片手で支えようと、どうやら休息がもらえた事への安心感なのか、既に彼は眠りについていた。

「俺が支えている、と言っても。立ったまま寝れるとはな……。相当に疲れた居たのだろう」

「あの、デュバルさん。ランニング中申し訳ないのですが、アゲルを部屋まで」

「ああ、分かっている。部屋まで運ぼう」

第一話『休息』？

『休息』？

アナトリアには観光客を呼び寄せられるような、歴史的な建造物や伝統的な祭りがある訳ではないが、多少ではあるが今のアナトリアは、父が生きていた頃の繁栄を取り戻そうとしていた。

週に一度は大きな市もあり、治安も回復していると言ってもいい。

経済コロニーの生活はほとんど労働の毎日で、娯楽と呼べる物は無いに等しいが、それでも以前と比べれば人々心のゆとりが生まれていた。

これもひとえにネクスト アグルの活躍がもたらした物。少しずつではあるが、経済は回復し、人々に笑顔が戻ってきている。

以前として薄暗い路地では恐喝や盗みが多いが、それでも昔と比べればマシになったと言えよう。

「フィオナとデート フィオナとデートお」

アナトリア中央部に位置する大きな噴水。

少し離れたベンチからそれを眺めながら、前から飲み物を抱えながら戻って来たアグルへと視線を流した。

「ありがとう、紅茶の方を貰うわ。あとデートじゃありませんから」

彼の手からアイステイーの入ったコップを受け取り。ストローでそれを一口飲み、乾いた喉を潤す。

「男女で町へお出かけ。……傍から見れば十分デートだ!!」

ストローを退かし、アイスコーヒーをがぶ飲みするアグルは「デート」の部分は引き下がれないのか、それだけは何度も否定した。

のんびりと噴水を眺めながら幾度となく言葉を交わす。

そして噴水の前には楽しそうに水と戯れる子供達で溢れ。

その隣には先ほど飲み物を買った移動式の屋台があり、他にも噴水を中心に様々な種類の露店や屋台が混在していた。

少し前は灰色だった町模様も、今では様々な色が町を染めあげ、楽しそうな人々の声と相まって、目と耳で私を楽しませてくれる。

「そろそろ行くか、郊外となると往復で結構かかるだろ?」

腕時計で時間を確認する。郊外にある父の墓地まで徒歩で二十分ほど、三時には一度研究室に戻らなければいけないので、それまでには用事を終わらせたい。

[illegible]

途中、買つておいた花を墓石の前に置き、フィオナは静かに手を合わせた。

優しく。撫でるような風が吹き。

フィオナの髪に乗ったピンク色の花弁をそつと摘まむ。

何？

それで納得したのか再び墓石に向き、少し間を置くとゆっくりと立ち上がった。

133

言葉短く言うと、先導するようにフィオナは歩き出し、アゲルは早足で横へ並んだ。

無言で歩くフィオナ。

機嫌が悪いのか、と思い盗み見るように顔色を窺うが、特別機嫌が悪いと言う訳ではなかった。

どちらかと言えば

「嬉しそうだな」

「え？」

「その顔だよ。なんかスッキリとした表情だから」

「父の夢だったの……」

「何がだ？」

「大分結果は違ってしまったけど、自分の研究でアナトリアが豊かになって、人々に笑顔を与える事が」

嬉しそうに話フィオナだったが、突如暗い顔を浮かべる。

「でも、父の研究が……AMSが軍事利用され、多くの人が命を失ったわ……」

「……それが分かっていたから、君の父は研究成果を頑なに他へ譲ろうとはしなかったのだろ？」

仕方ない、と言うのは少し無責任かもしれないが、確かにイエルネフェルト教授の研究は、使い方を間違わなければもっと多くの人を幸せにできた。

そしてその為に君の父は尽力したんだ。フィオナ、君はそれを誇りに思っても、悔いるような事じゃない」

子供に教えるように優しくそう話すアゲル。

小さくだが、
頷くフィオナ。

と、突如常時耳に付けているインカムに通信が入る。

「アゲル！ 今一体どこに居る！？ 直ぐに迎えを寄越す！！」

息を上げながら現在位置を訊くジェス。

同じようにフィオナにもエミールから連絡が入り、俺たちは位置を伝えた。

「郊外の墓地だ」

「分かった、今へりを向かわせる。それに乗れ！」

そこで通信は切れ、二人は一体何が起きているのかと混乱した。

結局訳が分からぬまま、墓地へと高度を落とすへりを仰いだ。

[illegible]

「何が起きたんですか!？」

私はツインローターが出す騒音にかき消されぬようと、声を張りながらヘリのパイロットに事情を訊く。

その声でパイロットは後ろを振り向くと、自分のヘルメットの耳の部分のコツコツと指で叩いた後、私の方に指を指した。アグルに對しても同じように指を指すと、再び前を向き、手元で何かを操作する。

『聴こえますか?』

聞こえてきた声がヘリのパイロットの物だと分かり、すぐに返事をすると、パイロットは話を続けた。

『現在、アナトリアに不明部隊が接近しているとの事です。何度となく交信を試みましたが、反応はありません。現状把握の為に無人航空機《UAV》を飛ばした所、すぐに撃破されたとの事』

「そんな……経済コロニーに軍事攻撃をかけるなんて……」

「敵の戦力は?」

『前方にMTと重ノーマルが確認されていますが、それ以外は……』
マッスル・トレーサー

結局、それ以上の様子は分からないと言われ、後は基地についてから訊くしかなさそうだった。

そして基地へ到着すると、アグルはすぐさまヘリから降り、ネクストがある倉庫へと走り。

私も出来る限りのスピードで管制室へと急いだ。

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

既にネクストの準備は万端であったが、アセンが前回のミッションで使用した中量級二脚のままであった。

機体へ乗り込み、最低限必要なチェックだけ行い、重要度の低い

要項はすべて飛ばす。

ネクストとリンクスが同期し、コンソールを弄る事なく、まるで自分の記憶を取り出すかのようにコンピューターから情報を読み取る。

（こちらにもノーマル部隊を出撃されているのか……ジェスも出ているな）

「不明部隊のアナトリア接近を確認。数は多くないけど、もう、かなり近い。お願い、すぐ迎撃に出て」

管制室に着いたフィオナから、催促されるように出撃準備を行う。

他の者を巻き込まないように、ゆっくりと機体を上昇させ、一定量上昇を行った後、アナトリアを抜ける。

「先鋒の部隊は撃破したが、後方にもっと大部隊が居るようだ。俺たちは此处でアナトリアの防衛に当たる」

敵の初撃を防ぐのが手一杯だったのか、部隊は隊長であるジェスを残し、ほとんどが身動きが取れないほどのダメージを受けていた。ノーマル部隊の看板を掲げては居るが、この部隊はジェスとあと二人のノーマル乗を残し、あとはMTで構成されている。

そんな戦力でも、敵ノーマルを四機撃破してくれたのは流石と言えよう。

「ダメ……敵部隊が近すぎる。作戦エリアを生活圏に重なるしかな

いわ。P Aは、使用できない。

被弾回避を最優先に、無理はしないで」

P Aは使用できないが、幸運な事に、今のアセンはA Pも多く実弾防御が高い。

しかし、幸運に打ち消すように不運な事態が一つ。

（突撃銃一丁に、ブレードか……中量ネクストの装備とは思えないな……すぐに準備できたのがそれだけとは……）

弾数は少なく、弾を節約する為にはブレードによる攻撃が必要、だがその為には被弾を覚悟しなければいけない。

（その被弾をどれだけ抑えられるかが勝負か……）

前方に展開するM Tがアナトリアとの距離を詰め始める。

考える事を止め、今は全力で敵に当たる事に専念する事にした。

弾薬は節約しなければいけないが、かと言って無限に敵の弾を受ける訳には行かない。

被弾率を抑える為に数少ない弾丸を使い、敵を間引く。

ライフルの威力が高いので、敵M Tは二発で撃破できた。

しかしながら敵ノーマル二機にA Pと弾薬共に、予想以上に持つていかれる。

そして最悪な事に

「え？　これは！　敵援軍を確認、移動要塞部隊よ！！
火力が高いわ、避けるしかない。無事で、お願い！！」

前方に一機。そして崖の上にもう一機。

前方の一機は崖の上にミサイル攻撃は可能でも、砲撃は斜面に弾丸が当たる為に攻撃ができない。

だが、崖の上の一機は、ミサイルも砲撃もどちらも可能。

なので、優先順位は崖の上の敵と判断し、一気に斜面を駆け上る。

しかし、更に事態は悪い方へと流れて行った。

崖を上っていると、頭上から機影が急速に迫る。

それが軽量型のノーマルだと気がつき、慌てて横へQBを吹かす。

“あの時” 味わったような激痛が脳へと走る。

苦しみに顔を歪めながら、今しがた避けた敵ノーマルは妙な動きをしていた。

移動要塞とノーマル。どちらが破壊優先度が高いのか、測る為にもすぐさま後ろを振り向き敵の兵装を確認する。

敵ノーマルは超接近武装であるパイルを持ち。もう片方の手にはショットガンと、PA無しのこちらにとってはいつも以上に恐怖であった。

もし現状あのパイルを一撃でも受ければ、二度とは動けまい。

初撃を交わし、パイルを放った事で無防備になった背中を無慈悲にライフルで穿つ。

一撃とはいかなかったが、再度こちらに攻撃するよりも先に沈める事が出来た。

もし、もう少しこちらの接近スピードが速ければ、食われていたのはこっちかもしれない。

そんな事を考えながら、敵移動要塞へと接近する。

大型の三連キャノン砲を避け。その次の瞬間に飛来するミサイル群を曲線を描くように躲す。

そして次の攻撃が放たれる前に、ブレードの有効範囲まで距離詰めた。

胴体へと、一撃。二撃とブレードを叩き込むが、敵は依然として健在。

再び飛来するミサイルを後方へ飛ぶことで避け。今度は機体上部のミサイル発射口へとブレードを向ける。

先ほどと同じように二撃。ブレードを放つと、上部が破壊され、ミサイルが使用不可になり、戦いを有効に進められるようになったが、しかし、この目前の一機がミサイルが使えなくなっただけで、崖下の一機は今もミサイルを放ち続けていた。

しかし、その接近していれば敵のキャノン砲は当たらない。ミサイルだけなら多少当たったとしても、然程大きな問題はない。

（あと二発と言った所か……）

そんな事を考えていると、後方に機影が映る。

それはレーダーに反応していたが、油断していたので確認を疎かにし、勝手にミサイルだと思い込み無視していた。

それがいけなかった。背部に凄まじい衝撃を受け、慌てて振り向く。

後方に居たのは、先ほど撃破した軽量型のノーマルと同じ機体。

P A 無しの機体に近距離でのショットガンが響く。

もし敵があのままショットガンを放たず、パイルの有効範囲まで接敵し、それを放っていたと思うとゾツとした。

しかし今の攻撃でA P が七割を切る。それを重く見たフィオナは英断を行う。

「機体被害拡大！ P A、展開します！！

あなたの安全が最優先よ。責任は、私が持つわ。時間はかけられない、急ぎましょう」

汚染を最小限に抑える為。そして心配するフィオナ為にも手早くノーマルを撃破し、再び先ほどの移動要塞に攻撃を仕掛ける。

これほどまでにP Aの恩恵は大きかったのか、と思いながら目の前の移動要塞を片付け。

今度は崖下に居るもう一機の移動要塞へと向かう。

既に突撃銃の弾丸は切れているが、PAがあるこちらにとっては大きな問題ではない。

先ほどと同じように、まずはミサイル発射口を叩き、その次に胴体を攻撃した。

「敵反応なくなったわ。汚染も致命的じゃない。なんとか成功よ。無理をさせて……無事でよかった。ありがとう」

残りAPは二割を切り、もしあのままPA無しでもう一機の移動要塞との戦闘を行えば、生きては帰れなかった。

それにしてもあの大部隊は何でアナトリアなんか……？

第一話『休息』？（後書き）

実際にこのアセンでミッションを行うと、かなりの確率でPAを強制展開されると思う……軽量機体だと展開前に撃破されるかも、と色々ストーリーに関係ない事を言ってみる。

第二話『AALIYAHへアリーヤ』

『アリーヤ
AALIYAH』

「レイレナード社の社長自ら俺に会いに来ただと!？」

朝のランニングを終え。朝食を摂るべく食堂へと歩いていると、後ろから一人の人物が走ってきた。

息を切らせ物々しい態度で先ほど起きた事態を説明するフィオナ。自身も混乱しているのか、いつもの違い、冷静さを欠いているフィオナの言い分は支離滅裂で同じことを言い回しを変え、何度も言っているだけで、極めて理解しがたいものだった。

要約してしまえばこうだ。

“権限”を使用し、無許可と言っていいほど、強引に基地の滑走路へと降り立つ大型輸送機。

企業間同士ならともかく、コロニー側から見れば企業からの使者と言うのはいわば“神”に等しい。

そして企業内でもごく一部が持っている特権を行使すれば、いくら軍事力を保有しているコロニーでも、容易には発砲は出来ない。

その中限りある者が所持する“権限”を使い。無許可で着陸。

航空機から降りてきた人物はあろうことがレイレナード社、社長
グレン・レイレナードの姿。

啞然とする整備兵や、もしもの為にと展開していた兵士達。

そんな彼らに対して、社長は一言「アナトリアの傭兵に会いに来
た」と言い放ち、タラップを降りた。

超が付くほどの重要人物であるレイレナード社の社長が今。フイ
オナ達が日々使っている研究室の一室に居るのだ。

彼がその気になればアナトリアのようなコロニーの一つや二つ滅
ぼす事も容易い。

今でこそアナトリアにはネクストと言う武器があるが、レイレナ
ードには数多くのリンクスと次期ネクストと呼ばれる新型ネクスト
を保有している。

失言一つ許されないような人物が突然現れ。フィオナは焦りに焦
っていた。

しかし、そんな社長自らの指名。アグルはフィオナに事情を聞く
と、急ぎ研究室へと向かった。

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

エミール・グスタフは、類い稀なる頭脳をフルに使い、目の前に
居る曲者に対して、どのように対応すればいいのか考えを巡らせて
いた。

研究室にはレイレナード社の社長を守る為の身辺警護の者が二人、それを除けば、室内には二人しか居なかった。

ソファーに座っている目の前の男はエミールから渡された資料に目を通してながら、頻りに微笑んでいた。

その微笑みは肉食獣が獲物を見つけた時の表情を思わせるほど、狡猾で猟奇的な笑みに見えた。

年は私よりだいぶ若く。記憶では三十の後半に差し掛かった辺りのはず。

質の良いグレーのスーツに身を包み。その間から覗く赤いネクタイが自身の存在を強く主張していた。

少し品が悪そうに見える組み合わせでも、そうは思わせないのは、この男の育ちが良いからなのかは分からない。

しかし、何よりも目に付いたのが、銀色の髪。

生粋の銀髪だと言われても違和感のないほど馴染んでいる。

その銀髪をオールバックに固める事で、大企業の若社長というよりは“マフィア”と言う方がしっくり来ていた。

結果的には品のよさそうな顔立ちや清潔感ある服装もすべて髪型と髪色のおかげで台無しにしているようにも思えた。

「質問は無いのですか？」

資料から視線を上げる事無く男は問う。

先に言葉を掛けるのはこちらだと考えていただけに、その予想が外れた事に少し困惑したが、それを隠すようにすぐに答える。

「質問を……では質問を二つさせてもらおう」
「どうぞ」

視線を上げるつもりはないか……もとより立場が違い過ぎるのだ。対等な立場での話し合いなど望めるとは考えてはいないさ。

「一つ目は、今回の目的」

「それに関しては貴方も聞いている事でしょう。私は“アナトリアの傭兵”に会いに来た」

あくまで、しらを切るつもりか……ならば。

「アグル君に会いに来た……ではなぜあの様な“物”をコロニーに持ち込んだ？」

「二つ目の質問だな、答えは簡単だ。保険だよ保険。

レイレナードの社長という椅子に座っているのだ。私の命を狙うものはいくらでもいる。だからその危険から身を守る為に必要な力」

「その“保険”とやらは誰だ？」

「『質問は二つ』……だったはずですよ？」

「ッ」

男は資料から顔を上げこちらを見ると、先ほど見たのと同じ笑みを浮かべた。

「まあいい。その質問には答えられませんが。一つ目の質問には詳しく答えるとしましよう。」

“彼”の前でね」

男はそういうと、資料を机に置き。開かれたドアの方を見た。

「レイレナードの社長からのご指名と言われたが。アンタか」
「ちょ、ちよっとアゲル。発言には気を付けてよね！！」

エミールが座っているソファアの後ろに立つアゲル達だったが、グレン社長が座る様に言うと、今回の主役であるアゲルはエミールの隣に座り。

フィオナはデスクから椅子を引き、対面するように座っているエミールの隣に付けた。

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

ふむ、資料にあつた写真とは少し違うが、あれが“レイヴン”…
…アナトリアの傭兵か。

「あまり長話になるとも思えませんが、座って貰えた方がこちらも話しやすい」

そう言い、私はアゲルと呼ばれた男の方を見た。

エミール・グスタフ教授と、イエルネフェルト教授の娘は、すべ

ての動向を見逃さないようにと、鋭く私を観察するように視線を送っていた。

「アグル君……であつていたよね？」

「ああ」

無関心と言った表情で返事をする彼だったが、この話を聞いても“無関心”ではおれまい。

そう思い核心から話す事に決め、口を開く。

「私や君たちも忙しいだろう。結論から話す。アグル君、レイレナード社は……いや私は君がほしい」

「……………ホモ？」

呆れるような彼の回答に、反応するよりも早く、隣で座っていた女性は素早くアグルの後頭部を引っ叩いた。

私の後ろに控えていた警護兵もあまりに素早い動作に驚き、懷から銃を抜こうとしてもしていたくらいだ。

警護の者に目線のみで、引っ込むように伝え。改めて話を再開する

「話を急ぎ過ぎたな。けして私は同性愛者なんかではない。私は君のリンクスとしての腕を欲している」

「そうかそうか。ならいいんだ。よかったなフィオナ。ライバルは増えなくて済んだぞ？」

「??？」

あろうことがアナトリアの傭兵は私の話に答えるのではなく、隣に座っていた女性と話始めた。

この様な扱いを受けたのは久方振り。しかしながら、いくら上の

立場と言えども、今回はお願いする立場。なら少しは大目に見よう。

「分かっているだろうが、我が社はAMSが高いリンクスを多く所有している。しかしながら逆にAMS適性低いリンクスは居ないのだ」

「雑魚がほしいと?」

「気を悪くしたら謝る。しかしそういう意味で言っただけではない。どの企業でも同じだろうが、リンクスは大変貴重だ。

ネクストを動かすためのAMS適性。これは生来の先天性資質であり、生まれながらの天才しかネクストは動かせない。

後天的に付け加える事はおろか、適性がある者を強化すら叶わない。だが、君は“進化”しているとしか言えないほどの適正を見せている。確かに“慣れ”と言うものはあるが、ほとんどは適性値の範疇と言ってもいい。

そして我が社では低適性の者でも高機動を実現できるようなネクストを開発したいと考えている。

最終的にはリンクスを必要としないネクストすら開発可能だと

「

「何が言いたい? モルモット 実験台にでもしたいのか」

「ふむ、リンクスなんて、言ってしまうえば全てが全てモルモットだろ?」

結果的には付く所が違っただけじゃないか? それにアナトリアの傭兵 アグル君がレイレナードに入ると言うなら、コロニーアナトリアは私達レイレナード社の管理下に置き、今とは比べ物にならないほど繁栄を約束しよう」

大げさに手を広げ、アピールをするが。アナトリアの傭兵は表情

一つ変えずに「断る」と一言。

「低適性で高機動を実現している君を手に入れられれば、研究も一気に進むと考えていたが仕方ない。

では、こちらで妥協しよう。これなら君も頷いてくれるはずだ」

後ろに控えていた警護兵を呼び寄せ、資料を受け取る。それを机の上に乗せるとアグルは資料に手を伸ばし、それを持つと、他の者も顔を寄せるように資料を見た。

「A A L I Y A H のカタログか？　と言うよりマニュアルだな。これがどうした？」

「君たちにそれをタダであげよう」

「この紙切れをか？」

「まさか、本物をだよ。内部パーツから外装まですべて。それ以外にも突撃型のマシンガンやライフル。背部武装のプラズマ兵器も付けよう」

「えらく気前が良い事で、それで。交換条件は？」

「データだよ。戦闘データ。これを使用してのデータを記録したい」「毎回使用しろと言う事か？」

「いいや。使用するかしないかは君たちの判断で行ってくれ。強制はしない。まあしなくてもアグル君は使用してくれると私は信じているがな」

私はその言葉を最後に、返事を訊くことなく席を立った。

扉を開け、最後に後ろを振り向く。

エミール・グスタフと、イエルネフェルトの娘は送るような姿勢を見せていた、それを断り再び歩きだす。

しかし、二人が私を見送ろうとした中、アナトリアの傭兵だけは

じつと私が渡したアリーの資料を見つめているだけだった。

廊下をゆっくりと歩く。

耳に付けたインカムから通信が入り。インカムに手をかざすようにすると、通話が始まった。

『アナトリアのハンガーで動きがあります。ネクストの始動準備のようです』

「ここでネクスト戦なんて起こすような馬鹿な真似はアナトリアもしないさ。こちらがネクストを持ってきた事に対しての対抗策として一応準備しているだけだろう」

『私達がレーダーに捕捉されてから1時間か……よい整備兵がアナトリアにも要るようですね』

「環境が良くても、リンクスはどうかな？」

『それは追々わかる事でしょう』

「ああ、態々リスクを追わなくとも、データさへ入手できれば十分だ」

予定をすべて消化し、満足そうに再び航空機へと戻った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5172u/>

時代遅れの鴉(AC4二次創作)

2012年1月13日19時59分発行